



60

65

70

75







師落合直文先生の御靈に、
つつしみて、このひと巻を、
捧げまつる。

毒草序

ホルバインの『髑髏舞』は精舎の壁畫なれば
措きつ、文藝の界にて凄愴の極を盡したる書
名を擧げむに『こぞの雪今やいづこ』と詠じ
けむギヨンの歌に『絞首罪人の賦』あり、魯敏孫
の漂流を語りしデ・フォーの作に『倫敦瘟疫記』
あり、スキフトが『幼兒屠殺私議』は絶代の冷
罵義憤を洩し、ド・クインセが『英國食煙者傳』
『殺人美術論』も名に負ふ曠世の奇文なるべ
し。つゞいて獨逸にはホフマンの傀奇なる空

想顯はれ、亞米利加は更に悽慘の鬼才エドガ
ア・ポウを生みぬ。されど末世澆季の暗潮は前
世紀の後半に及びて益、其奔流を逞うし、近代
佛蘭西の詩社に一大旋水を作して、モリス・ロ
リナアの『神經症』、バルベエ・ドオルギイの
『妖鬼』等は皆愕かれぬる人心の狂瀾なれど、ボ
ドレエルが一代の詩集『惡の華』こそ其最も甚
しきものなれ。鐵幹晶子二氏の新作『毒草』も此
類のものか。

あらず、これは奔放の意を盛りたれど、鳩毒の
直に命を絶つ如きものにあらず、適、夢幻の氣

を泛べて而も鴉片の心を奪ふ恐無し。清新の
調は既に卷頭の『絶句』に味ふべく、蒼古の姿、
日本武尊の『哀歌』に忍ばれ、源九郎の斷篇『清
水詣』はかゝる類の國詩中、明治新調の最も成
効したる作ならむ。加ふるに卷中收むる所の
小品は所謂詩家の文にして、措辭結構の奇、正
格の散文と異なるも亦一種の妙なり。されば
此『毒草』を以て近代佛蘭西の詩集に擬する
は謬れり、寧ろ現代英國の詩伯にしてまた散
文の名家たるスピンバアンが青春の作『歌謠
第一集』に比すべきか。以て凡俗の膽を奪ふに

足り、士人の意を強うするに餘あらば、著者の
本懐は達す可けれど、願はくは、之に第二第三
の集をつぎて、益、詩嶽の峻嶺に向はむことを。

明治三十七年初夏

東京 上田 敏

友の集成る。ひらき見て、ことばなし。たゞ
暗涙のすべなさを覺ゆるのみ。何の涙と
か、あゝみづからも知らぬを。そよ、これぞ、
世にそむき、人にそむきて、かくてたどら
むを命の、われらが、はかなきよるべには
あらざるべきか。
あゝされど、友よ、うらやましきは、君が上
なるかな。さにあらずや。たゞまことの人
生の意義、解せむをつとめよとはいふは。
志かもその解せむの一語は、君によりて、
そのまことなる、ゆゑしき意義を示され
たるにはあらずや。

さらば友、われをして、なほこゝにわれら
 すべてが師とます、ゲーターの君の御こ
 とば添へしめよ。

何人も命あり、されどそれを知らぬが多
 し。

それを解し得たる所、そこにまことの樂
 あり。

友よ、われはあらためて、心から、われらが
 詩神の御前に、君が生涯のみつかへの、ま
 たくまことならむをこそ、祈りまつらめ。

辰どし若葉の節

内海月杖

毒草目次

詩文

與謝野鐵幹

絶句	(新短歌)	一
哀歌	(長詩)	八
蛇いちご	(短歌)	三八
おもひで	(長詩)	四一
宵寝	(俳句)	四四
荊叢毒葎	(短歌)	四七
清水詣	(長詩)	五四
山祭	(長詩)	九〇
船路	(小説)	一〇四
蕉人	(長詩)	一三五

金蓮花	(短歌)	一六八
秋の夜	(長詩)	一七六
鳴鐘	(長詩)	一八二
あざみ草	(長詩)	二三八
飛鳥かぜ	(短歌)	二四二
春のひと	(美文)	二四七
搖籃	(長詩)	二五四
すだまの歌	(長詩)	二五七
夏草	(短歌)	二六三
福鳥	(長詩)	二六九
君	(美文)	二七二
夢のうら	(短歌)	二七九
涙の記	(美文)	二八三
なでしこ	(短歌)	二九三

詩文

與謝野晶子

自朝	(短歌)	三〇五
金翅	(短歌)	二六
つみびと	(長詩)	三四
ひみち琴	(長詩)	三六
宵寝	(俳句)	四四
浦物語	(美文)	六九
やつれぎぬ	(短歌)	一三八
七日がたり	(美文)	一四一
橋姫	(長詩)	一六三
こほろぎ	(短歌)	一七七
母の文	(美文)	二一五
耕芍薬	(短歌)	二六〇
自朝	(短歌)	三〇四



伊上純鹿

海島 第一

毒草

絶句

鐵 晶
幹 子
共 著

ゆきすりにあゝただひと眸め、それもえ
にしや、あゝただひと眸め星のまなざし。

わが戀は火中なの車、かた輪わぐるまよ、た
だに怨を載せて燃えける。

水出づる黒髪の花、透きて眞白に、君を
めぐれる瑠璃の夏川。

天みれば黄金星の夜、成るや此の時、眞
珠は海に歌は御胸に。

花ぐさに鹿の音にほひ、古りし寺々、金
泥ながす奈良の村雨。

よろこびは千載にいく夜、願ふはひと
夜、あまき口づけあゝ君この夜。

あゝよしや、肩に肘きき唇は御唇に、こ
こ

こは去なじな髪しらむまで。

聞の戸の月夜こほろぎ、汝れは樂童、こ
の寂寥を美しく奏づる。

山蓼や野菊や萩や、露の小徑に、かしこ
と指しゝ黒谷の塔。

わが歌は君をかざると、これやさし櫛、
天輝る地輝る玉のさし櫛。

鶴のごと白きひかりや、ゆるせ少時、お
もふは今よ君がまぼろし。

朝顔の露の末花、なほも秋姫、うつろひ
隠す小さき紅皿。

黒髪は肩にみだれて、うしやさし櫛、わ
かき愁を掩ひかねつも。

君を得て足らひし今日も、ゆるせ少女
は、君に額よせよ、と泣くかな。

あゝ今は消ゆる花夢、寒き沈黙に、古り
し御堂の像のごと寝む。

君を見し牧の通ひ路、さりやその日の、

わかれに摘みしひるがほの花。

衣通りて地に曳く光り、君よあえかに
えこそ忘れね沁みしおもかけ。

君が詩よ火焰の疾風、戀に羽搏てば、あ
なや捲かれて我もむせびぬ。

薺花に眉根つくるひ、それも昨日や、切
にこの人君を思ひし。

木がくれの甘き無花果、さりやわが戀、
母の乳なして人は知らずも。

夕つゆに殿あむ小蜘蛛、やさし願ひや、
星の一つを地に齋かめ。

紅梅が縫ひし花笠、内に誰そ在る、君に
よく似し王子うぐひす。

母神はかしこにいます、あらはせ御名
と、藝の子なれば鑿もて參る。

星めぐる天のおばしま、さらばその宵、
わするな君とうるむ睡や。

ゆきすりの名知らぬ微草、汝もわりな

や、手ふれて見れば色に染みける。

君戀ひてなづむ若子が駒に食ますと、
和泉に長き青草の路。

春山の小谷の水にちるや小椿、孔雀尾
なして青渦わきぬ。

紅梅にしろき鳥飼ひ愛づる十五が、う
はなり嫉み美しくしきかな。

春海にしら羽かげさし光いてりて、君
とわれ載せ歸る鳥船。

玉ならば奈良の京ゆく君がかざしに、
去ら鷹ならば狩の手上に。

— 鐵 幹 作 —

哀 歌

(人々と草を分ちて日本武尊を歌へる中より)

またたけば千載と過ぎし
舊事か、はたや昨日か
今日と云ふ近き現か、

晝の夢あかつきの夢
小夜の夢、夢つかさどり
人の界にきたり天はせ
飛ぶ神の羅ごろも
うち被きうつらうつらに
見し夢か、心うつけて
委曲にえこそ覺えね、
おだしくも圓らに肥えて
牡牛なす真白き猪の
吾が越ゆる伊吹の山の
行く道に反芻食む如も
よこたはり遮ると見しが、
残りたる樹下の雪の

春の日に融けて形なき
ありさまに且つ消えにけり。
この時よ如何なる遠か
聲ありて『真北の海ゆ
志那都比古水雨を誘へ、
霧の神大戸惑子
妹眷して天の間戸ゆ
舞ひくだれ、今』とぞ叫ぶ。
『お』とばかりおなじ應諾は
寝る鳥の羽搔くごとく
ひそやかに幽かに響み
山脈を憾れば、やがて
蠢惑の垂りぎぬなびけ

舞ふ霧は嶺谷を掩ひ
鉛箭の百千箭なして
氷の雨はしとどと降り來。
これや此の石長姫が
幽宮氷目屋の内を
透き見して、然しも醜めき
顰む眼に觸れぬる時し
人みなは凍え慄き
立氷なし氷柱石なし
氷るてふ禍殃見るか、
御伴等の剛者どもは
倏忽に心利放り
身は冷えて路に臥しぬ。

あなさては美濃の古山
伊吹山年へて栖める
禍神の伊吹醜男ぞ
吾を遮へて禍殃ふらしも。
『さかしらや、空手に捉られ
人の界に率ても往なる、
恥知れ』と頬に笑み浮べ
高らかに呼ばむとすれば
こは如何に咽喉ふたがり
音は出でず、搏たむとすれば
枯木なし小手冷え萎へて
踏む脚も舵のごとく
ちからなく蹶るこそ跳れ、

このたびは最けざやかに
聲ありて『あはれたもしる
あれ見すや小確の尊
冥護にと姨が佩かせし
神寶劍はいづら、
空手して禍妖の坂
今過ぐる、疾く此處過ぎよ
よき門は前に開かめ
幸ありや、ひゝら、ひゝら』と
笑みつれて拍手うちかはし
舞ひ咀ふ者のけはひや。
やがて突と大地裂けて
くらがりの真洞の道に

反轉はんてんび墜おちちし驚駭おどろ、
閉しぢし目を開ひらけば彼方あつち
千足ちあし踏ふむ遠とほき彼方あつちに
いと小ちひさきさ青あおの光ひかり
愁うれはしの一いつ火ひもゆる。
もゆる火ひに足あし困なみながら
ちかづけば、そこには一人
慟なげ哭なち涙なみだながれて
まら髪かみも濃こ鈍鈍の衣えも
うち浸ひたりしとどと濡ぬれし
姫居ひめいて、諸手しよてを面おもてに
ひた當あたてて俯うつ伏ぶし泣なけり。
吾われれぞ知る、姫ひめが名なこそ――

人の界かゝりに陰かげあるかぎり
もろもろの禍殃わざはひ盡はきす
貌佳かほよきも力ちからたけきも
情なさけあり心こころ賢さとしきも
うるはしき時に遭あはねば
あなあはれ、七里ななさとわたし
香かほる木きも悪わる木きにまじり
へろへろの麻幹あしにまじり
朽くつるごと、秀すくれし人は
佞人ねいじんの嫉妬あつたのしたに
愚人ぐじんの嗤笑わらのなかに
恨言うらみだに云いはむすべ無く
衰おとろへて過ぎも行くかな、

そを歎きそを悲むと
青山も枯山に成し
泣き枯し、千船うかべる
海河も啼き酒すてふ
泣澤女、さには有らぬか。
言ひ知らず吾が胸寒き
凄涼と幽愁おぼえ
立盡し姫がさまの
あはれさを打目成りしが、
彌更に八千尋ふかき
根の國の巖のきざはし
ひと足に一節謠ひ
列なめて上りかも來る

細き音よ、蘆の枯葉の
夕霜にわななくがごと、
うらがなし、朝没る月に
邊つ浪のささやく如して、
「好き凶日、今日の凶日も
満ち足らひ麻賀禮わが國、
大王はひと日が内に
人の界ゆ千頭絞り
血に塗えて持て來と宣らす、
乞ひ禱むは千五百の産屋
人の界に日ごと増りて
死人の盡きすあれかし。」
聞き知らぬ悲しき歌の

如何にぞや颯と止みぬるに
目路移し素焼小皿に
黄楊櫛の津間櫛燃ゆる
一つ火の彼方を見れば、
死鳥の鴉羽色の
伊那志許米穢き闇に
曲道の真洞つづきて
黒がねの透戸を鎖せる。
透戸には如何なる人か
雄心を失はざるや、
影のごと瘦せてさびしき
眞素肌にも衣も掩はず
黒髪は疎らに細く

その末は脊長に餘り
底知らぬ闇に引くらし、
挿頭には眞白き薊
蛇之比禮亂して挿し
おのがじじ透戸に立ちて
言葉なく唯愁はしく
ほくそ笑み此方見やるは
歌のぬし黄泉醜女等。
見るからにいよよ昏迷と
吾がこころ力うしなひ
水沫なし淡雪なして
現身も今か消え行く、
「あら憂し」と塞げる息に

呻吟く時、翡翠色の
うるはしき羽衣つけて
十あまり二つを踏えぬ
うらわかき清き童男の
風のごと突と降り來しは
天なるや神の眞名井の
御水取司水分男

『いざたまへ、こは神の子の
少時だも在すべきかは、
蛆多加禮斗呂岐てなも
伊那志許米志許米岐境
出雲なる穢き國の
黄泉國伊賦夜が坂に

行きかよひ曲道つづく
名は喪山。——そのいにしへに
手弱女の下照姫が
亡き夫の天若日子を
葬ると出雲の國に
喪屋つくり日八夜八夜を
哭泣しが、吊らひて來し
姫が兄高日根子はも
その容姿の天若日子に
甚能くも似かよひたれば
過まりてその父のらく、
『吾子が妻は伏び歎けど
吾子はなほ死なで在りけり』

こを聞きて比賣が兄は
白眼して甚いきどほり
曰ひけらく、『我は麗はしき
友なれば吊らひ來つれ
何しかも我れを穢き
死人に比らふるや』と
御佩せる十掬の劍
抜きもちて喪屋を切伏せ
八束穂を鶏の食むごと
御足あげ蹶ゑはららかし
離ちたる喪屋は飛び來て
美濃の國藍見の河に
化りけるはこれの喪山よ。――

死の神の饗代招ぐと
日も夜も黄泉醜女は
ここに來て穴戸に居寄り
透見して人の界望む
あな穢な御足反せ』と
いふいふも吾が手ひきしが、
たちまちに童男は消えて
こは何處、母の乳汁と
うるはしき清水流るる
丘の邊の日の夕暮に
吾は一人立つか有らぬか。

吾が心は空虚よ、あな憎憎、

こは夢かも、いかにぞ胸ぐるしき。

忘れ得ぬその歡喜——彼の尾張に

眞玉と見てし女が手の夢ならばや。

高御空も(死ぬ身にあゝ甲斐なし)

翔りてなも往くべき意勢はや。

別れに置きし少女が小床の邊の

嚴の太刀はや、太刀はや、そも有らなく。

玉倉部や玉なす清水がもと

今杖たて擲へば心ややに

寐めぬる覺ゆ。あらしよ、こは限りの

寥しきゆふべ。吾が眼に靡く黒雲。

青垣山ごもれる高原の上へ

濃き緑に吹き滿つ初夏風、

父の帝の大和は國の眞秀靈

美はし、戀し、いつの世そをまた觀む。

世に息延へ命の全けむ子は

明玉はや瑣瑣に美須麻流垂れ、

光裳ひける少女と手執り行き

平群の山の檣の葉髻華に挿せや。

憂き國見し汚穢に身は病み朽ち
あな石なし心はいよよ冷ゆる。
人としあれば甲斐なや現人神
ああ人のこと今はも吾は死ぬらし。

鐵幹作

金 翅

肩を垂れ裾にそよぎし幾尺は王が手に
にさへ捲かれじなとも

親もすてぬ神もいなみぬ夏花の外に

趣もたぬ人の君ゆる

かへりみれば君やおもひし身をやめ
でし戀は驕りに添ひて燃えし火

棲みて三とせ後は百とせ中のひと日
犠牲にたまへと來しや寂寞

こがね矢をそびらになせる神將がむ
かふ軍か君が行く奈良

集とりては朱筆すぢひくいもうとが
興ゆるしませ天明の兄

友染の袖十あまり圓うより千鳥きく
夜を雪ふり出でぬ

わが春の笑みを賛せよ麗人の泣くを
見すやとひまなきものか

牡丹とよぶ花にまされる子ならむや
戀がよそほふ春の大王

湯の宿や霧にとられし朝鏡山にいね
しをわびても見たる

丘の上の有明月夜草の笛つらしとわ

れをいにしにもあらず

われと歌ひ自らほろぶいのちにも似
るものなきを誇らせむとや

二十すでに君におもはれ道の子に否
とこたへし名にやはあらぬ

春の花はいまだ梅のみしろき山人の
子ほめのおん歌おほき

少女子のおもむきあるをあがなふと
玉の御座を賣る子もあらば

自らをよしとたたへし百首歌あかす
おぼさばかすそへ給へ

鶯は餘寒のとばりあつう鑽し朝ぬる
窓はよぎらぬ鳥か

なほ戀ふとやのろひの弓の弦に長き
琴の緒だきてまどへるのみぞ

あゆまじと柳をひきぬ眉のあたり君
が口なるにくきわが歌

紅梅の花櫛すがたいつきえて二尺に

たらぬ袖御眼なれし

野をおもひ牧場をおもひやはらかき
羊に似たる眼おもふとありぬ

相すまむと待つまもはやく今日のき
てわれのみものは思ふおとろへ

君を戀ふとこれ歌ならす君を戀ふと
君えて云ふに人わらはむか

御兄に水仙いけむほそゆびの御つめ
染めこよわが京の紅

神を知らず道をならはずわが魂はい
と幸さいはひにはぐくまれにし

もとよりなり天女てんじよに似しはよきかた
ち君をいだくはわが右手みぎて左手ひだりて

歌かずあれ畫師えしにあふ日は畫をこそ
と姉あねがのろひし扇あふと妹

君が歌はこの春の夜に似ると召しぬ
わが師とよびし美しくしき人

戀を歌ひまどひに沈み罪におちかく

てうとまぬ神をのろひぬ

たえなむとしわれだに知らぬいつは
りが時をつなぐと知りそめし戀

松まつが中なかの花にぬかよせ耳みみをふる白の
御馬うまをよしとおもひぬ

ゆるされて水ふみわたる春の野やあ
らぬを富士と君もまどひし

あくがれやこころの欲えの美しくしき飢
ゑすくはずば罪おひまさむ

少女なれば脈に華さく夢は見しわが
身おつるを戀とやおもひし

伯母が寺愛宕のふもと鳴瀧に椿ひる
ひてあらむ世なりし

品子作

つみびと

わかきをよびてつみ人と
君よび給ふつみ人が
五つのゆびはふるる緒に

ものの音をひくちからあり

とけては朝のみづうみに
むらさきながすわが髪や
みだれてもゆるくちびるは
ここにまた見る花のいろ

君よ火かげにすかし見よ
君がぬかづく神いづこ
寺に古りたるしらかべの
聲なき晝とは何れぞや

かくもいみじきつみ人の

ふるさとこそは君しるや
はたまた美をつみ人と
名づくる國へつれこしや誰

——晶子作——

ひとぢり琴

もとより琴の緒にしあれど
うらみにひくき音もこもり
のろひにたかきおともせむ
ほそ緒しら木のひと柱琴
君ふれ給ふことなかれ

35

もとより戀の琴なれば
はだやはらかういだかれて
きくべき胸のささやきを
あこがるるともしたふとも
ああ君ふるることなかれ

36

ひと緒の琴のわが戀は
ひとりの人にふれてより
やむよしもなき音は高う
戀にうらみにある時は
人をのろひにやすきひまなき

——晶子作——

蛇いちご

聴法や龍女もまじりおはす夜か横川
は鐘にしら梅のちる

をさなうて母とわびにし里のごと涙
もよほす戀古りにけり

いささかの白髪は見ゆれ業平に或は
肖つとも啓させ給へ

まろびてもをのこをさなく泣く日な
り黒髪おちてなびく御足に

わが歌にしら衣かへし舞はぬ子は牡
丹が根にぞ斬りて棄てまし

門出づる女ぐるまや施主の君小室は
暮れて山ざくらちる

姫親王の御集にのこる君が名と史官
が諱まぬ御代まち給へ

京にして九郎が得たる静かと古りぬ
る旅の日記おどろしき

むらさきの御袈裟かづきて僧都らが

まろ寝よろしき春の大原

この男御酒もたぶべし鎌君にざれ歌
申す器量はべるに

はづかしき尼そぎすがた京に来て舊
りし紅屋が主の柩守る

やまとにて観るも美しくし徐氏が子に
折りてかざしし春の花牡丹

妻が髪のおとろへ思ふわびすまひ
男なれども泣くを咎めじ

古

41

五つより蓮月が手に丈のびし兄の阿
闍梨も老の見ゆるかな

わが歌は法師愚庵に秘めたまへ父の
如くも怖き顔せむ

藪つばき今も多かる若王寺狸でると
て母に添ひし路

— 鐵 幹 作 —

おもひで

七いろの靄もて掩ひ
まろがねの樂に送られ
風のごとまぼろしのごと
いづこより來るおもひで。
星月夜百合さく空か
青潮に雨ふる海か、
細おもて清らに瘦せて
黒髪の身に泌む姿。

汝を見れば心は躍り
汝に聞けばむかしは戀し。
にがかりし、つらく泣かれし
戀のあと、世のあらそひも、

うき人も、忘れし人も
のろはしく怨みし事も、
汝が神の語るを聞けば
みな戀し、なべて美しくし。

姉神の『夢』にまさりて
くしわざはいともさやかに。
おもひでよ、汝が笑むしたに
うしなひし光は還り、
さづけぬる汝が手の上に
あたたかき涙ながれて、
わびをとこ、なさけ冷えたる
堅石の心は和ぎぬ。

世の中を況して思へば
戀なくてすがれし姫や
尼すみやのこりし妻や
たをやめのやさしきどちは
汝れをこそ嬉しとたのめ、
夜に晝になぐさめがてら
やは羽うちおとづれて行け、
なつかしの女神おもひで。

— 鐵 幹 作 —

宵 寢

小盗あり、澁谷が貧居に忍ぶ。刺す所
ねまき一領、殆んど遺憾なし。活東見
舞に來る。席上の即興かくの如し。

鐵 幹

盗人に春の寢姿見られけり

盗人の逃げたる宵や花曇り

妻がきぬ雛のきぬも盗まれぬ

若かりし盗人と思へ桃の朝

盗人は五里を柳に落ちけらし

歌反古に春なる宵を小盗人

盗人や撰者と知らぬ春の宿

菜の花を分けて去にしや小盗人

盗人の訴状むづかし春の雨

晶子

盗人に宵寝の春を怨じけり

盗人に雛を誘る寝顔かな

47

雛の灯に盗人を追ふ夜半の春

戸まで具して雛を捨てし盗人か

雛の句は袂ながらに盗まれし

盗まれし紫縹子や節句の帯

荆叢毒蘆

病こそ高き窓なれ観るによし世やは
小さき我や大いなる

ふたりなる世の煩悶の後腹やまひは
賢し信は幼なし

日も夜もちから上なき大みかど病い
つけば襟あはさるる

病みぬれば人もかわゆし我も欲し熱
き涙の流れぬるかな

許し給へ今日に執するわが一日病ま
ぬ十とせは價なかりし

去ら隼が削おひて眠る山岨の杉の夜

かせと死は人に寄る

病める身は戦ひ負けし城のあとのこ
る瓦か才かれし歌

去ら雲は空ゆく人は病ありこの日こ
の時死なぬわれ見る

死ならずよ人は如何にぞ生くべきと
耻ぢぬいのちを思ふべかりし

春潮の青きに浮び行く船の圓き帆の
ごとわがこころ足る

博士らにひだりの肺の血は分けむお
もひ得たまふ事おはすべし

魔ちからのしたにいのちの火は燃え
ぬ死よ謝す君がくるがねの錠

戀ありて詩ありて嬉しひと日だに病
めば光明の満たぬ日は無し

ますらをはこの大地に使しぬ歌ひ花
うゑ飾らで往なめや (以上十四首病中の作)

雨の日は春の蚊いづる清瀧やもえぎ

蚊 蠅 うつ山ざくら花

哈爾賓は少女齊々哈爾酒によし哥索
ことしも北に還らぬ

芍薬は似す緋牡丹や近からし京のを
とめが扇さす襟

父君になさけ能く似しこの爺が手向
くる歌は毬にのらぬか

母ぎみよ雛の籠をさぐりませ小き皇
後のふえておはさむ

美しくしき六歳の女王とそだちては弟
たちの中に光りし

これよりは父が帛裂く荒歌に花ちる
春の悲愁添ふべし
(以上四首大矢正修が愛女の喪
にこもれるに)

君が家の戀は清淨しらぎぬに白百合
おほひ神の手づから

世に勝てと我は男子につくられて今
日たまはりし美しくしき妻

もゆる火の火中にさぐるしらはちす
猛者には猛者の戀を得しかな
(以上三

首眞下飛泉の新婚に)

千曲川みぎはみぎはの戀がたり江戸
の作者が興おもふべし
(谷活東の信州に赴くに)

あがなひの六とせの後は神ぞ知る光
明に歌へ新しき生

うらわかき友の面さへ奪ひぬる王が
地上の獄を讃へむ

ますらををは六とせ牢獄ひとらに子は幼な才
女才むすめゆゑ瘦せし世ならぬ (以上三首友の六)

とせの獄より歸れるに、妻さみ某女詩人の許まで寄せたる

— 鐵 幹 作 —

清水詣

(源九郎義經の幼時を歌へる)

—

家門は平氏、地は平安、
時は平治ぞ、天に謝せ。

村鳥むらトリしのぐ白鷹しろたかの
英姿いさほ猛まうなる左馬頭さまのかみ。
天魔てんまや魅み入る、おろかにも、
不覺ふかく人なる瘦公卿うすきみの
信賴のぶたよりばらに加擔かかして、
我われから首くびを持もて來くるは。

まやつ、小童こどもの惡源太あくげんたい、
親おやを見真似まねの雜言ざいげんか、
安倍野あべのに來れば、出迎でむかひの
三千餘騎さんぜんよは影いづこ。
待賢門たいけんもんの夜あらしに
矢聲やこゑたかきも興きようこそ有れ、

まじる雨雪とちりちりに
消えを急ぎぬ、源氏がた。

入道太政大臣の
鎧のうへの緋の法衣、
帝を掩ひ、世を壓み、
最ふくよかに見よげなれ。
公卿將相、一門の
榮華の花に、釘ひとつ
打つ子もあらば招せむと、
紅衣の童子眉やさし。
入道殿のおもひもの

常磐の前が、清水へ、
微行詣の日は今日と
洛中こそぞる五條坂。
被衣、伏目の小女房、
銀鞍、頬赤の田舎武者、
車ひかせて、巻纒の
公卿も混り見ておはす。

彌生の空の眼も彩に、
柳の萌黄桃の朱や、
紺青ながす加茂の水、
淡紫の山の霞、
さながら京は、錦もて

七重につつむ繪巻物、
一枚くれば、金泥の
清水詣あらはるる。

あはれ、まばゆさ、華美さ、
これや微行か、六波羅の。
褐色、葡萄染、水干の
色まじへたる五十人、
御酒たまはらば、一さしを
柳かざして舞ひぬべき
うらわかげなる雑色ぞ
群れて、先追ひ、後追へる。

女ぐるまの貝すりに
黄金の紋は揚羽蝶、
(内ぞゆかしき、玉だれの、)
鳳凰繡ひし出だし衣、
だんだら綱に牛かけて
いと徐やかに、長閑やかに、
この一しきり廻る時
春日も伴れて轉るらし。

二

『富貴の門に、指かみて
狗を羨む痴者の、』

他人もさぞやと、汚れたる
己が心に推しはかる、
斯かる歎ちたき世にありて
切に我こそなげかるれ、
心ふかかるとも
やはか知るべき、わが今を。

頼みきこえし頭の殿
わりなきなかを訣別れては、
おくれまつりし女子の
羈絆は重き恩愛や。
母が命をすくひたさ、
遁れし宇多の里いでて

復も都へ、有ることか、
警敵の門をくぐりたる

母がいのちを赦る上に
三人が子をも助けむと、
(鬼の口なる花はちす、)
嬉しと見しは仇なさけ。
引かるとは無し寄ると無し、
無體の戀もつひ其れに、
荆棘を抱く心地して
わが夫ならぬ夫がさね。

心は故殿に、身は亡骸、

御後逐ひても死ぬべきを、
これ煩惱か、迷執か、
女人輪廻の罪業か、
忘れがたみの牛若が
前途猶も見まほしく、
笑みさへ作れ、六波羅の
黄金の柱、身は瘦せて。

今日の一日の山詣、
まことは過ぎし頭の殿
後世安穩におはせとて、
冥福いのる我が供養。
極悪底下の女人さへ

救ひ給はむ本誓に、
絶りてこそは、喃薩塵
汚れぬる身も参りつれ。

憶へば、妾九歳の
夏にぞ覚えし普門品、
十五へかけて、月ごとに
三十三巻読みまつり、
十九二十は、年ごとに
法華經百部淨寫しぬ。
今も日毎に、端嚴の
三十三體繪にぞする。



柳の袿、やまぶきの
唐衣すがた優なるに、

三

ああ我が薩埵、一生の
信心功德、ことごとく、
慈悲のうてな、廻向して
二つの祈誓、こめまつる。
いかで、故殿の成佛に
利験のひかり與へませ、
これなる童髻牛若が
現世の福に障りあらずな。』



○ 佛 教 之 神 像

四

佛 教 之 神 像

心にくしや、紅梅の
おん衣重ねて數しらす。
丈の黒髪、あなかしこ、
下座に曳いても行くものか。
檜扇もるる容顔よ
是しら梅の凝る所。

九條院の中宮に
よき女房を召されしに、
天が下なる稀びとの
千人がなかの百を選び、
百のなかなる十人選り、
十人のなかの第一と、

選びに入りし此の君を
あゝ顯證にも見まつるよ。

こは可憐の少人ぞ
常歳六つの牛若君、
白綾裁ちし狩衣に
むらさき末濃の刺貫や、
童すがたの美しくう
羞ぢて隠るる母が袖、
女房二人に手を執られ
御堂に上る春の晝。

六孫王は跡古りぬ、

白河殿にわが父の
舌捲かせつる爲朝を
伯父と仰ぐも愉快し。
八幡公はほど經たり、
待賢門に重盛の
膽冷しつる義平を
兄といつくも心地よし。

母は二十四うれひては
少し憔悴の見ゆるこそ、
玉を相する貴人が
瘦せて死ぬべき姿なれ。
小人凜々しき眼眸は

源家の血なり、聲ひそめ、
これ獅子の兒を野におくと
驗者おどろき訴へまし。

母子しづかに、參籠の
道俗わけて進むとき、
あはれ、微妙のうしろ影
圓光かざすけはひあり。
未代稀有の影向と
今日の御堂に拜むもの、
本尊薩埵の外にまた
この二菩薩や加はれる。

斯かる殊勝の結縁に
遭ひぬるものか、忝けな、
山に餘れる老若の
貴賤群衆手を合せ、
七條かけし大徳の
僧都の坊も珠數もみて、
隨喜に湧ける感涙を
雨しづくとぞ流しける。

—鐵幹作—

浦物語

(上)

「美しくしき物語きき給はずや。」と、人避けし松かげより出でて、再び並びべられし肩の細うやはらかき藤の花染めし水色絹は美しくしき線見するよと、助教の君見おろして思ひぬ。

「わが問ひ撤回させむとのたくみには乗ら
じ
少女、

「君に答の猶のこりありしを忘れぬ。されどわが語らむとせしも、彼の夫人の上の事なり。」やうなだるる頸に、「正直なる君かな」と手かけて、

「たはぶれなりしをかをるの君。」

「彼の人を世にまた無う美しくしと見るは誰も
々々もかはり無し。」

猶ほ腫子は白きいさごの上にのみ注がるは、バナナの香まじるやはらかき息の、餘りに近う額髪吹くためと云ふことわり知り給はぬ助教の君、

「かかる時もうげに語り給はむには、美しくしき戀がたりも、わが耳には、許るし難うし給ひし君が伯母君の、われ諭し給ひし時と同じ心地に悲しがるべし。見たまへ、灯はとぼりぬ、兄君の間の欄干に。」

「灯は美しくしきものかな。」と幼なげに何ことも忘れし如く云ひて、

「われ此處へ来て灯の美しくしさ覚えぬ。かなたは何處ぞ、昨夜もまた明日の夜も君眠り給ふ市の灯と云ふを知り給ふや。」

一しほ近う寄り添ひて、さて腕ごしに松原の方、わが旅館の階上の灯を一つ二つと數へて、

「君は誤り給へり、彼の灯はわが部屋ならず、園岡子爵の間なり、彼の夫人の間なり。」

「さらば我等があとを兄君は追ひ來給ひしなるべし。我等が物語に幸あたへむとのみなる君も、一人は堪へ難うなりしなるべし。」

「あらず、彼の夫人と夫人の愛子の彼の旅館に在る限り、兄上に寂寥の感なかるべし。大學に鞭とりし日より、都會の病院に在りし日より。」

「彼の黒き瞳子、すぐれて房やかなる髪は、河原木ドクトルにさへ物愛づる心起させてや。」

「長き黒髪よりも、彼兒がたをやかなる頬こそ、

伯林より歸りて後、いづくかへ潜みぬし兄の血を探りあてし貴きものなり。」

「ドクトルがこの旅寢には、彼の人の寫眞を伴ひ給はざりしか。」

「わが行李へと云ひしを、兄は苦笑して止みぬ。兄が三とせの胸の苦しかりしことは、われ園岡夫人への物語にて聞きぬ。そは我も疾く推し量りるし想ひなれど、彼の人の口よりは初めてなり。」

正雄は思ひ出せしやうに、

「子爵はいつ京へ歸り給ひし。」

「昨日なりしか、來給ひて四日目なり。」

「如何なる人がらにや、君は屢々語り給ひしか。」

「廣瀬伯を知りぬ給ふべし、ただ彼の人なり。」

のや、禿げ上りし形も、また夫人を限り無くもて
なすさまも。」

『何と云ひ給ふ、廣瀬伯をそのまゝの老人とや。
彼の夫人が年齢を聞かせ給へ、麗人がよはひぞ美
しき。』

「十七とや見給ひし、二十はわが來年なり。」
海より來し風はこの時ひだりの鬢をしどけなう
して過ぎぬ。

櫛さぐりて撫づる間を、南のかた加太の岬の遙に
淡路の由良が崎と瞳子あはすなかを、虹に似し雲
淡う懸れるを眺め入りし男の袖ひきて、

「されど麗人が老いぬよはひは此後にこそ見
め、美まめ。今は猶そのまゝなるよはひぞ美しくしき
な。」

二十二となり。子爵は四十一とぞ。」

『二十二』と正雄はただ斯くつぶやきぬ。

「さるなかに得がたき戀の生ひし初を知り給
ふや。美しくしき物語とは其れなり。猶きかじとし給
ふか。」

『われさる美しくしき閱歴を持てる子爵を知ら
ぬこと悔やし。相見て後きかば、一しほ興は深かる
べきに。』

「わが物語に子爵は餘りに用なし。」
かをるは男のいぶかしみ惹きしわが詞を自から
笑みて、

「怪しみ給ふな、われは正しからぬ戀かたらむ
とするにあらず、神の持ちこし最も正しき戀語せ

むとするものなり。聞き給へ。夫人として子爵の間
にかしづかるゝやうになりしは、彼人十七の秋と
ぞ。おなじ京に生れし同族の姫、帳のおくに乳母侍
女の手かたちに容かたちづくられし新婦は、世の中の何事をか
知るべき。戀も、愛も、そは人として最もさびしき事
と思ひ給はずや。そのさびしさをさびしとも感せ
ず、四年よとせすぐし、春より身ごもりぬ。我が兄に夫人
は語りぬ。去年の夏となり、いと暑かりし日の夕、例
とて大きな合歡くわんの木のもとに椅子二つならべ
たるを、子爵のさそひ給ふを待たず出でて、日に切
なう成る胸より苦しき息いきつきゐる時、おもしろき
もの見せむと子爵は手にせし物を卓の上におき
ぬ。夫人は眉まゆひそめて、紅べにきすぼん着けし士官しきんが女

に戯るる畫のみ多き雑誌にや、我は今胸の切なさ
にえ堪へぬなり。子爵はや云ひたまふな、君に受け
し曩むかしの日の辱はづかしめを償ふにあまりある畫のみな
り、見給はずや、泉に手くみて遙なる空のあなたを
仰ぐ少女の清らかなるを。古代の鎗やりもちて戀人を
守る猛者むげの雄々しきを。よき畫かなと夫人は初め
て云ひぬ。そは此國の鹽原の溪流いりに似し山峽さんげつの景
なりし。さて二頁三頁。想ひ給へ、このあひだの時間
こそ夫人が戀と云ふもの愛と云ふもの知らざり
し二十年の最終しゅうの時間なりき。聖母マリアの後ろ
に負へる榮光の環わこそまばゆく前に披ひかれぬれ。
そのかひなるは何。うまれしイエス、みづからが
指吸へるイエス、最もをさなきイエス。この時夫人

が胸は大洋海の浪ひとつ揺らぎし響して、さて堪へ難う心ときめきぬ。と思ふ思ふ血はうしほの如く頬に額にのぼりきぬ。あやしき心地に夫の手に口つけし夫人は、今母となる愛を覺え、夫子爵は初めて妻の戀を得ぬ。これより後は君の描き給ふに任かすべし。彼の一家の人人は今最も世に幸福なるべし。神のめぐみの飽く所なきを感ずる人人なるべし。」

『待ち給へ、さらば彼の夫人が神に謝する詞を我にまなばしめ給へ。斯くぞあるべき。(この子が父を夫とするわれ。)] 猶つづけしめ給へ、(この子をさばかり愛づるドクトルを友とするわれ。)]

「君は無神論者にていませしか。」

『をかしきこと云ひ給ふかな。われに君得させし神に、わが信あさしと云ひ給はじ。たゞ告げまらせむ、われ君を得るまで、をんなの堅き愛なるものに信を持たざりき。』

「をんなの戀に。」

『さなり、君をおきては今も或は然るべし。されどわれは子爵夫人が戀なるものを信せずと云ふにあらず、たゞ子の愛より分けられし戀を受くる夫とこそ。されば表つくり見給へ、わが子を愛づるドクトルとの答をわれに否み給はじ。』

「はや我に要なし、君が云ひ給ふ所をよしと、われ強ひても思はむ。君と我とは一つのものなれば。』と口疾に云ひしは、旅館の裏木戸にからめる夕顔

の白きが目にさやかに映るまで、近う來しを知りて、週毎の土曜をここに兄妹たづぬる理科大學の助教授、いま講習會に大坂に在る立波正雄と語るひまの早すくなきを知りければなり。

『しか思ひ給ふか。』と正雄手をかたうしめぬ。仰ぎ見るまなざしの美しくしき此の燃ゆる如き色は、世に限なき人として持たじ、ただこの人の兄ドクトルのみ同じ瞳子は持つなりと、正雄の心みちぬ。

(下)

大鳥神社の杉に落雷せし日より三日経て後の大雨の晝より、幼き重光はいと能う泣くやうに成り

ぬ。夕となりては青き筋額にあらはるるまで。されど未だ妹具して中の島の官舎の伯父訪ひにと昨日出でしドクトルは歸らず。昨夜ぞ夫人のためには極めてさびしき夜なりし。今日もまたわが友この子の友なくて過すべきかとは、今朝夜あけてよりの夫人の思ひなるを、今重光はこのさまなり。この次の汽笛のひびきにあはせて待たむに、ドクトルの君歸りき給はずば、堺へ人やるべし、醫迎へに。乳母に斯く云ひし夫人は、あらぬまで聲みだれたり。難波和歌山間の汽車の笛は、一時間々々ごとりに後ろの松山をおとづれぬ。されどドクトルは未だ歸らず。こは必ずかをるの君がわざなり、妹の君にすゝめられて、歸さを彼の髭美しくしう剃りし友

と共にせむと、土曜の明日の夕まで留まらしむるに非ずや。乳母に抱かせし子を上より見横より見て夫人はドクトルを待ちぬ。ことわりなう、妹の君をうらみぬ。流笛なりと、甲斐なしと知りつゝ、獨つ乳母が聲は、くるほしき夫人をしばしやすらかに爲す力あり。

「八時五分のにていませしか、さらば次は早や終列車なるべし。」と、こなたの廊の前を旅館の女に導かれ歸るはドクトルよ。

「あな。」と走り出でしは夫人の侍女なり。忍び泣の聲をドクトルは早くも聞きぬ。

『夫人は』とあわたいしう呼びて、簾障子の外に立ちぬ。かをるは静かにその後ろに。樓の女が手の

燭は物に驚きしドクトルが横顔を青じろく照しぬ。

「わがドクトルの君入り給へ、わが夫の我等母子を保護し給ふ君と頼みきこえしドクトルの君。」と忍び泣の人は簾障子近うるよるさまなり。かをるは樓の女と共にわが間に歸りぬ。

幼子の病は夫人が思ひしよりも、初めドクトルが思ひしよりも、その夜の夜なかとなりてはげしう成りまさりぬ。もとより腦の病なり、かばかりの幼子にあるべき事と、ドクトルの絶えず心づけし病に外ならざりき。二人びきの車にて夜の二時すぎ此處に着きしを子爵と知りて、かをるはいとほしと思ひぬ。堪へ得べくもあらぬ大きな病に、今は

泣く音さへ幽かになりし愛子を、小さき臥處に見
む時、美しくしき妻の半ものぐるほしう魂ぬけし人
のやうなるを見む時、子爵の心いかならむと十疊
の間に獨り坐して思ひ居たり。府立病院の院長と
今ひとり髭しろき博士は夜の明方大坂より來り
き。されど重光は早とこしへに覺むべくも無う眠
りし後なれば、何れも夫人が上を心づけて歸りぬ。
夜は今あと無う明けたり。昨日の雨の名残に、沖は
猶霧いちめんに籠めて、武庫の山の頂のみほのか
に見ゆ。浪うちぎには早や朝の潮に浴せむとす
る旅館々々の男女が麥藁帽かす數へがたきまで
に成りぬ。海濱樓のおぼしまに倚るは河原木ドク
トルなり。限なき人とてかばかりにあらじと、助教

授が、ふかき思に打たれし妹の君よりも、猶すぐれ
しかたち持つは此ドクトルなり。伯林の三とせの最
後の一年は、この人の面の上に拭ふこと難き曇り
を帯びさせぬれど、されど美しくしきは河原木ドク
トルなりき。伯林のかりすまひは、なにがし博士が
二階なりき。その家の娘テレザは姉なりき。ドクト
ルを思ひぬ。ドクトルはやうく十六の少女エリ
サベットを戀ひぬ。夕は食卓の前に、さまさまのを
かしき物語つくり出して、求めむとせしは妹娘エ
リサベットの笑顔なりき。かくてわりなう思ひし
エリサベットは人に嫁き、初めて父博士の間に水
いろぎぬの衣きしを見し日より、よき人と思ひぬ
し。テレザは水に赴きぬ。ドクトルの寫真いだきて。

歸りて後の三とせをかしくすがたのぬしはそ
の人なり。戀ならじ、われは幽かなる闇に果なう思
ひをたどるなりと、ドクトルは觀じ居たりき。友の
勧めに此春より一家を京都へうつしぬ。一家とは
家庭の後ろ見する伯母をおきては、はらからのみ
なり。敢てめとらじ、われ此闇たどる心うせぬ限り
戀は得られじ、人と親まじと堅く思ひ居しドクト
ルは、この海邊にて園岡子爵の子をさなき重光と
相知りぬ。おのれを忘れてこのあひだドクトルは
闇追ふ心を忘れ居しなりき。ひと夜いねずて疲れ
し腦は、頭のなかに鬼ありて汝は復もとの闇に歸
らざるべからずと囁やくと覺ゆるなり。今ふとあ
げし腫子に子爵夫人はうつりぬ。その柱に立て

〇

るなり。わが方まもりて、松葉色の紋透矢の限なう
皺つきしをまとひたる亂れ髪の人、つかくと
寄りきぬ。

「君は重光を泣き給ふか、うれしき君かな。われ
今夫の無情を知りぬ、彼の人は彼の神の如きもの
を此浦にて灰となして歸らむと云ふなり。今にし
て知りぬ、ここへおきしは我につらき目見せむと
てなり。君こそ彼の子にはよき人なれ、泣きて賜は
るよ、君は。」

『美しくしき神の子を子とせし母は、さるはした
なきさまに泣き給ふべきものならず。薬まゐらせ
む、徐かに飲み給へ。』

「いとよきドクトルの君かな、わが夫は斯かる

こと云はず、わが夫は鬼なり。われを君が間に伴ひ給へ、そこにて眠らしめ給へ。」

『ねむ氣おぼえ給ひてや、何も君が云ひ給ふまにすべし、そは子爵と議りて。』

夫人はひとり歩み入りぬ。そこにはかをるの在ればと、心やすうドクトルは目送するなり。戸のかけより出でしは園岡子爵、ドクトルの手を取りて、

『君はわが妻を救ひ給ふべきか、これ唯君が力なり、あはれみ給へ、われを、妻を。』

『心やすう居給へ、われ在る限り君が幸は安かるべし。』

いとうれしと子爵は思ひぬ。二日へて旅館のあるじは、小さき壺の美しくしき錦もてつつめるを子爵

に捧げぬ。病める夫人を情あるドクトルに委ねて子爵は京に歸りぬ。ドクトルが従前の間に臥せる

夫人は、その時まで夫に一語をも發せざりき。

子爵去りて一週の後より夫人の病はうすらぎそめぬ。ひと月の後には、ドクトルに伴はれて海邊に出づるやうに成りぬ。ドクトルが肱かして歌ふ彼方の詩を解し得ては、笑むやうに成りし此頃の夫人よ、おもこそ瘦せぬれ、重光のありし時とても見ざりし美しくしき色の頬に泛ぶことさへあり。立波助教授は土曜ごとにかをるを訪ふことを怠らざりき。ある時かくさゝやきぬ。

「子によりて人生の意義の半を知りし子爵夫人は、今ドクトルに由りて完全き人とは成りぬら

山寨

(源九郎義経と伊勢三郎との事を歌へる)

(一)

遽かにもこの日は暮れて
 くらがりの如法夜叉闇
 むら杉の木立とどろと
 かき亂し狂ふあらしや
 面うつは雨かあられか

矢つがへて射るにも似たり
 この山に魔障のありて
 義経をためすとならば
 其れもよし雨とあらしと
 歇まずあれ百日八十宵

足柄を越えにし其の日
 義経にひがしの國の
 荒武者を三十萬騎
 率ゐ立つ大將軍と
 成らむこと許しませすば
 この峰をやはかは西へ
 往なむやと誓ひし我ぞ

されば今こをどりしつゝ
火を燧りて焚きても過ぎむ

あきびとのおやち吉次は
鞍馬なる法師たばかり
我君を率て行くほどの
末の世の不敵人なり
年々に黄金買へばや
陸奥の旅も幾たび
踏みまどひ山路に暮れし
恐ろしの夜には慣れぬと
京なまり小唄をかしく
もろ手うつ大荒れの中

かゝるをり地を裂くばかり
一すぢのいなづまの影

「あ」と見れば又も一すぢ
すさまじき光さしけり
さいはひやひと目みつるは
おごそかに大きな門
さぐりより叩きたまへば
内よりはけはひ優しく
袖おほひ手燭さしのべ
うらわかきをとめ出できぬ

鹽釜に詣づる者ぞ
行き暮れて雨になやめり

ゆくりなく訪ふもえにしや
宿かせとのたまひたれば
額しろきをとめすがたの
もの羞ぢて口籠るこゑに
わが夫こそ國をゆすりて
人の知る心猛なれ
よき敵の今日もありてか
朝いでて未だ歸らず

宿ひと夜かしまつらむは
何ほどの事となけれど
さりとしも夫の知りなば
客人に悪しき目みせむ

かくいらへためらひぬるに
あさはかの事のたまふよ
あはれさは知る人ぞ知る
いささかのなさけおぼさば
足よわのこの旅の者
しばしだに寄れと云はずや

ことわりに女は打笑みて
いざ内へさらば客人
歸り來む主に知らさじと
灯は消して衾ひきませ
くだかけの一こゑ鳴かば
疾く起きて出で立ち給へ

人の世はともかくにも
安からずさはりはあるよ
わび給ふ秋のひと夜も
或時はおもひでにこそ

(三)

みやこにも稀有なるばかり
心ある女が會釋やと
うち興じ衣うちしほり
内に入りあたりを見れば
さながらに國司が館か
いかめしく城づくりせり

なかなか灯あかくかゝげ
常のごと高き鼾聲に
ひぢまくら吉次とならべ
おほらかに眠りましけり

夜も更けて子も過ぎしほど
門あらく足ふみならし
鬼づらの老武者どもは
右ひだり四天王のさま
おのおのがとりし矛には
なまぐさき生血たれたり
こは如何に勝ち誇りたる
十八の面のくれなる

悠々と笑ひさゝめき
山寨の主は歸りきぬ

わかき眉くろく秀でて
まなざしの怖きしたには
江戸、葛西、西の大名
ひと目みて百里のがれむ
つはものに手斧にぎらせ
まろうどの衾めぐりて
うるはしきおん顔ながめ
手を三たび拍てばやうく
折烏帽子すこし揺れて
欠伸して起き給ふかな

あなゆゝし此年ごろを
東國の鄙に育てば
われ未だまろうどのごと
をかされぬ威形そなはり
膽ふとく天がした呑む
將軍の相こそ知らね
沈みては龍もしばらく
こもり沼にかくれぬる世ぞ
雲まちて此にも一人
名のりせむいざとぞ云へる
似かよへる汝が若さよ
おもしろし願ひは容れむ

我こそは源氏の嫡流
義朝が末子九郎義經
おもひ立つ志あり
奥州の秀衡たより
はるばると都を出でて
うき旅に年を重ねつ
はからずもこよひの宿に
縁ありて名のりはするぞ
あなやとて座をすべり伏し
さればこそ此借目にも
人中の眞玉しら玉
氏高き君と見わきし

やつがれが父なる者は
伊勢にして源氏に仕へ
左馬頭討たれたまひし
その後を此にさすらひ
國びとの中に生みしが
かく申す伊勢三郎
甲斐もなきやつがれながら
年日頃いかでふたゝび
花さかむ源氏の御世に
天がした爲しまつらばと
つはものを密かに備へ
時まちて此に候へ

岩が鼻山の名きくも
をさな兒が泣きをとどむる
山賊の姿あさまし
かくしてぞ身はやつしける

年ごろの願かなひて
我君を今日見まつると
妻を呼べは青きからぎぬ
赤裳ひき御銚子とりて
奉るいはひの酒は
きこし召せおふけなれど
百萬の平家ありとも
みさぶらひ三郎こゝに

一人して楯は足れりと
雄々しくも誓ひ誓ひぬ

しろがねの轡はませし
君が馬おのれ口とり
奥州へ御供の門出
さらばとて勇めるうしろ
さばかりの雨雲はれて
くだかけはほがらに鳴きぬ
いはけなき女ごころや
涙ぐみ見おくる柱
將軍とわが夫の上
下野の夜は明けにけり

船 路

(一)

隅田川丸が馬關を出帆するのは十二月三十一日、大晦日の午後四時。

冬の日の短いうへに、正午すぎから曇りだして、今にもこの乾風に氷雨でも降りさうな空は例日より早う暮れた。この四五日石州ざかひの山から避寒に下りて來らしい、帯のやうな、灰色の濃い、霧は此港と門司と兩方の港に粘りついて、如何にも

凍けて離れない。霧のなか、最早兩方の港の火が海を隔て、天の河を中にした星の夜のやうに輝く。それに出る船は、いる船、とまる船、幾百の帆檣に紅白の火をつけて、大阪以西第一の繁華を誇る港は、今日の大晦日の故で一層の活氣を帯びて居る。昨日夜ふけて大阪から入港した隅田川丸は、此港からの積荷も濟まし乗客も載せ終つて錨を揚げ出した。

『川卯の御客です、川卯です。』

○に川の字を書いた提灯を振つて、一艘の端艇が遅馳せに急いで右舷に漕ぎ寄せた。

「早く、早く」と船梯子の口に立つ事務長の聲。「お氣をお附け下さい、お危険うムいます。お手廻は宜しうムいますから。」と川卯の若い者は提灯を左の手に、右の手で確乎船梯子の欄網を掴んで、端艇の動搖を制して客を揚げた。

客と云ふは男女二人。

瑠璃紺の二重廻の頭巾を眉深に被つた男の顔が、口に啣へた葉巻を一吸ひ吸つてぱつとした時、其黒い美事な髭の一部を見せたばかり。女も黒の吾妻被布に藤紫のお高祖頭巾、顔は見えず、男の左の手に絶つて俯視きがち。

「上等です。」と下から若い者が注意した。男は事務長の會釋に一寸頷いたまゝ、船丁の案内する艫

の上等室へ下りて行く。舷側の水仕口で大鍋を洗つて居る、白の汚れた小倉の夏服の上に焦茶の古びた外套を被つた炊夫が、

「ちよッ、野郎に手を取られ奉りの、能く出来てらあ、阿魔め。」と二人を見送つて吠いた時、船は波を斫つて動いた。

告別のあはれを此の不骨者も知つて居るかの如き太いだみ聲の汽笛が續けざまに響く。これは他船との危険を警めて吹くので、狭い此の海峡を通りぬける間。

夕暮の急潮は墨よりも黒い。

わづか十二時間たつか経たぬにその國の一部の釜山に着くことの出来るとは云へ、朝鮮は外國、乘

客は誰人も是れが永く日本と訣れる旅のやうな、
二度と見られぬ故郷のやうな氣がして、今更甲板
に驅上つて、遠ざかる陸上を振り回つて、悄然として

一齊に名残が惜まれる。

彼方燦爛とした陸上の夜景は、希望と幸榮とに満

ちた光明の世界で、最早明日の春が明日を待たず

に來たやうであるが、乗客はその光明の國を逐は

れて、この薄暗い地獄の淵のやうに渦巻く大洋の

上を、永久に歸れぬ淪落失意の島へ流されて行く

やうな心地も爲る。

明後日は黃海を左に見る長直路沖で、小雪に成つ

て舞はうと云ふ海風が、最早今から小躍りして船

を離れない。寒さは一しほ身に浸んで慄々させる。

「諸君、諸君、お聞き下さい。」

突然起つた若い甲走つた聲は、人々の甲板を下り

て各自の部屋に就かうとする思ひを制止めた。

と見ると、荒い久留米がすりの筒袖に、紺絞の兵兒

帶、白い小倉袴を短かく附けて、淺黃霜降の烏打帽

に護謨靴を穿いた書生姿、面長な、夜目にも色の白

い、何故か黒い色眼鏡を懸けて、年は十八九か、それ

とも實際は、二十を越したか、二歩三步後すぎりし

て、艦の上等室の天井窓に居凭つて立つた。

乗客はその郷國と別れる少時の沈思から喚起さ

れて、まだ夢の全く醒めきらぬ心地で、何れも半無

意識に、聲のする方へ聲を圍むやうに詰め寄る。

「演説ちや、演説ちや。」と十三四の小僧船中で菓

子を賣る役の小僧が、頼まれて振れ廻るやうに呼はつて、事務室の方から駆け寄つて、是れも聴衆に加はる。

如何にも演説である。この奇怪な演士、船中の謀反人、社會黨、小刺客とも見るべき書生は、手筈に鳥打帽を脱いで、帽の廂を右の手で抓んで打振り乍ら

「僕は胡亂な者ではムいません、船長さんには僕の現籍が分つて居ります。大阪府知事が呉れた旅行券は、確かに僕が三箇年間韓國に旅行することを許して居る。

諸君、ふるい言葉ながら、袖と袖とを觸れ合ふも前生からの縁で有ると申します。況んや今日、諸君と僕とは、この美しい故郷を離れて、同船し

て、この寒い時節に、この荒い波の上に、目的の地を同うして旅だちを爲ますと云ふのは、能々深い御縁があるのでは有りますまいか。

それに今日は何日であるか。申すまでも無い。十二月三十一日、日本中の人が收支の決算に目の廻る程の日で有ります。今日一日が越されぬ爲には、陸上の人が如何程の苦しみを嘗ますか。心にも無い争ひを爲る人も有らう、祖先からの家郎田畑を人手に渡す人も有らう、娘を賣るやうな悲しい人も有りませう、刑事上の罪人に成るやうな淺ましい人も有りませう。又この一夜を越せば明日は正月元日、めでたいめでたいと酌み交す屠蘇の酔ひには、家内も和らぎ、親類縁者

朋友も睦じさを増しまする。
嗚呼諸君、大晦日と元日、この二つの一年の太切
な日を、温かな故郷にも暮さず、睦じい家族友人
とも共にせず、お互に千里の海外へ舟を同じう
して、寂寥しい斯様な旅行を爲ると云ふのは、如
何なる理由が有る爲めでせうか。
國利民福、この四字は立派な言葉です。諸君の内
には官吏として彼國に御出張なされる方も有
らう、實業家として奮發して旅行せらるゝ方も
ムいませう、手段と職業とは違つて居ても、御目
的は皆國利民福の外に出でません。であるから
諸君は、今こゝに故郷の姿が段々と遠ざかるに
係らず、故郷と別れる名残は惜まれるに係らず、

男子の涙を抑へて、勇ましく朝鮮海を横断なさ
れる譯と思ひます。
言ひさして演士は振回つたが、船は海峡の大部分
を通過して了つて、馬關の港は疾くに見えなく成
つて居る。聴衆も一同振回つて見た。折と云ひ場所
と云ひ、演士の云ふ所は高德の上人の法話のやう、
一語一句が身に浸みる。感に打たれた聴衆は、再び
演士を見守つたまゝ、無言である。

(三)

「然るに諸君、悲しむべき事には、諸君と船を同じ
うし行先を同じうして居ながら、目的、志を同じう

して居ぬ者が三人、この船の中に乗つて居ります。演士は感情の激昂を抑へやうとして、俯視いて、左の袂から田舎びた自地の手拭を出して、頬に顔を拭うた。雨の頬は紅をさしたやうに熱上て居る。船員が飼つて居るのか、大きな茶と白の斑の洋犬が、悠然來て、菓子賣の小僧と並んで演士の前に蹲まつた。

『諸君、その三人は人間……人間の皮を被つた……さやう、此處に居る此の犬と同じです、此船には此の犬を加へて四匹の畜生が乗つて居るのです。』

諸君お寒いにお氣の毒では有るが、何卒お聞きを願ひたい。

その畜生の一人は僕、即ち斯様に申す私。』この

時下等室から階を上つて、半身を甲板に出した、洋服着の四十恰好、人夫の親方とも思はれる男が、
『船の若い衆、おい、酒を呉れせえ、酒を。』と中腰に成つて、長州辯の胴間聲、最早船に乗るまでに稻荷町の何處かで、門出と年忘れとを兼ねて、十分と過ぐして來たらしい。

『お、寒い、酒をお呉れませ、船ちやあ御嬢より徳利でございす、温といでなあ。』

船の中部の厨事室を向いて獨話したが、振向ざま足を階段から轉落らうとして、危く階の入口に手を掛けて支へた時、艦の人だかりが眼に附いた。

『何ですかいの、……救世軍、……船の中で耶蘇坊はあのお説教は源助や。』

渠は茫乎とした酔つばらひの眼を見開いて、夜目に此方を透したが、蹣跚と歩み寄つて、演士と並んで右の方へ腰を掛けやうとした。如何したか腰が轉つて尻餅を軽くついたが、その儘兩足を犬の前に投げ出して、

『御免なされ、へえ、耶蘇の御宗旨は耳にはいるかな』

手を組んだまゝ、ぐなりと頭をうなだれた。折から一人の船丁が小さな角燈を持つてきて、演士の左の窓の上に置いて、是も聴衆に加はる。角燈の火で酔つばらひの顔が斜に照らされて、膏の乗つた肥太の頬から額がてか、いと赤い。半眼に細う開いた眼は、實は最早眠つて居る。この男の鼻息と犬の

鼻息とが、演士と聴衆との間尺ほどの小徑に籠つて、それに角燈の光がさすのを、菓子賣の小僧は口を細うして眺める。

演説は餘程進んだ。

『そこで渠は僕の姉とは七年前からの許嫁である。渠が高等商業學校を卒業した曉には、僕の家の分家として、僕の父が三年前に言ひ遺して死んだ如く、五萬圓の遺産分配を受けて、和泉の國で紳士の尊敬を受け得る幸福者で有つた。もともと紀州の瘦士族で、父が維新前に些少の義理が有るとは云へ、その末子を拾ひあげて、學問をさせたいやうへ、娘を呉れて、分家をさせる、巨萬の財産を譲る、さやうな事は能々渠を愛せねば』

思はねば出来る事では無い。
渠が僕の父の恩義を感じたならば、誠に身を粉
にしても報せねば成るまいと思ふ。

渠は昨年高等商業學校を卒業しました。而して
如何したか、姉と結婚することも厭、分家するこ
とも厭、財産の分配も要らぬ。斯様な亡き養父の
恩を忘れ、許嫁の妻を捨て、本家の當主たる僕を
侮蔑にした暴言を吐きます。

愚かなるかな渠が恩ある父が遺産を受けざる
こと。無情なるかな渠が貞淑なる許嫁の妻を泣
かしむること。僕も姉も親戚も渠の友人も、皆渠
を諫めました。人非人なる渠は頑として聞入れ
ません。

諸君、渠が心を腐敗せしめて、如此き畜生道に墮
させた畜生が一人あります。

それは東京の素町人の娘、美人だの、高等女學校
を出たのと云つても、決して畜生で無いと云ふ
證據には成らぬ。渠が薄弱な心を溶解して、許嫁
の我が姉を棄てさせたは、全くその素町人の貧
乏娘の狐めが業である。

渠はその狐と結婚爲ました。墓の中の父と、姉と、
僕と三人は、未來永劫忘れられぬ侮辱を、渠等の
畜生から受けました。

演士は齒がみを爲て、雙眼に涙を浮べたまへ、その
美しくしい顔に、怒氣と云ふよりは鬼氣と云ふべき
凄味を帯びて一同を見廻した。殊にその大きな黒

眼鏡が、人を咀ふ魔障の物の、闇黒を透して見る眼
球のやう。

『は、あ、御道理でげす。して奴さんは如何しまし
たえ。』

前に居た、山蠶紬の黄いろい綿入羽織を着て、大福
の縮緬を重いほど腰に巻きつけた、職人風の、三十
恰好の男が、軽い關東辯で訊ねる。

『それが貴方は、この船に乗つて居やはるのど
すがな。毒性な女えな、まあ、男はんも。』

傍から口を挿むのは、鶴の羽毛織の被布の上に、白
縮緬の首巻を門徒宗の御開山の繪像のやうに巻
いて、黒の中折帽の似合はぬ、是はこの度藝妓一人
舞妓二人京から仕入れて、下等室に潜ませ、行先は

仁川か京城か、それとも新開の鎮南浦か、歳暮の儲
けには遅れたれ、正月を當てゝの大陸遠征、頭の禿
げ振では長年朝鮮浦鹽斯徳を股に女街商人の其
で有らう。

『乗込んで居ます、この船の上等室に。』と演士は
叫んだ。

『知つてらあ、馬關から女の手を引いて乗つた、う
む、彼客だ。』と犬の頭を撫で、小僧が。

『彼客か』皆も頷く。

演士は一層悲壯な語調に成つて、

『渠は今度仁川の副領事を拜命して赴任します
る。官吏として多數の上に立つと云ふには、心術
から品行から多數の上に立つだけの立派な者で

無くては成らん。養父の遺命に背くその大恩を忘れて了ふ、さやうな者の口から如何して正義が説かれる。養父の遺産と許嫁の妻女とを狐の如き一婦人に見換へて耻と爲ぬ、さやうな薄志弱行の者の身で他人の善悪が裁判出来るか。僕は日本の道義公德を維持する爲にも、渠が如き畜生の亡び失せることを祈ります。』

言ひさして身を戦かしたが少時はまた言葉が途絶える。仁川の副領事と聞いた時、女街の老爺は密とこの列から身を隠した。老爺の跡へ順送りに立つた、焦茶の一本綾の二重廻を着た金齒の紳士は、右の手を懐から出して、濃い、美しい形な髭をいぢりながら、

『お話を承れば我輩等も切齒に堪ん、十分に御胸中は察するばい、一體當今の官吏社會が不良ぢや。硬直高野孟矩君の如きが大聲疾呼して政府を罵るも所以が有るけ。腐敗、腐敗、あゝ官界の空氣を一掃するは政黨内閣に在るかな。』

山登紬の職人は後に附いて、

『先生、政黨内閣てば、かうと一番陸軍大將西郷隆盛てえな豪氣な方が政事を成さるんですかね。』

『まあそぎやん、なもんさ。』と紳士は苦笑して、更に演士に、

『貴公が、してまた畜生と自分を云ふは、何ちふ次第ばし有るかな。』

演士は嬉しさにその秀でたる眉を昂げて此の

問に答へた。

『僕は野蠻時代の如く、腕力を以て渠等を殺さうとは爲ません。言論を以て公衆の同情に訴へ、公衆即ち諸君の公平な裁判を求めて渠等の滅亡を速やかに爲ます。僕は渠等畜生の行く處に付き纏うて、一夜も渠等に安眠を與へぬ事を一生の目的と爲ます。京都の高等學校を二年で退いて、斯様な諸君と異つた目的の爲に此の船に乗合はすのは、僕もまた畜生の心に墮ちたのでムいます。』

諸君、僕の敵は此の下に居る。』と覺えず拳を堅めて凭り掛つた上等室の天井窓を打つた。窓硝子は薄氷を割つたやうに碎けて室内に墮ちた。





此は野村時代の如く、故郷を以て志す。

 とは爲す。然るに、此の如く志すは、

 故郷の情を懐くのみならず、故郷を

 改むるの志をも有す。是は、明治の

 志士が、一たび東洋に宛てて、

 故郷を改むるの志をも有す。

 此の目的と爲す。京都の高等學校を二年で

 退いて、斯様な諸君と異つた目的の爲に、此の船

 に乗合はすのは、僕もまた吾生の心に願ふ所の

 でムいす。

 諸君、僕の敵は此の下に居る。」と覺えず、筆を

 擧げて、此の如く書いた。上、等室の天井窓を打つた。

 此の如く書いた。上、等室の天井窓を打つた。

 此の如く書いた。上、等室の天井窓を打つた。

『何を爲るッ。』
室内からけたい、まいう叱つた聲は、皆が演士の高潮に達した激語の爲に感轉た逼つて、『畜生ッ。』と同音に叫んで拍手した響音に紛れて聞え無かつた。

(三)

『はつくしよ、お、寒い、ひどく揺れくさる。』
人夫の親方と思はれた長州辯の酔つばらひが目を醒ました時は、甲板の人だかりは疾くに散じた後で、船は正しく玄海に掛つて居る。
風は荒し、浪は高し、加之に咫尺を辨せぬ如法闇。

の中を怪物の如く横ぎる船には寂として人聲が
無い。たゞ機關のひびき、風のさけび、浪の崩れかゝ
る音。

『すっかり冷えやがった、どれ一つ湯婆の爛を爲
るかの。あゝうんとこしよ。』

長州辯は立上つたが、揺れ上り揺れ下る甲板のう
へを、踏みしめ、踏みしめ、厨事室の方へ歩いて行く。
がちやりと音をさせたのは、背廣の隠袋の銀貨を
抓んだので有らう。厨事室の戸が開いて少時して
閉つたと思ふと、また蹣跚と上等室の天井窓の側
に歩み寄つた。

『嘔吐臭い中へ歸るのも邪魔けた。』

闇中に菊正宗の四合瓶三本を卸して、一本を取あ

へず瓶の口から煽る。つと窓の側に腰を掛けて、支
へに左の手を附くと、一段高う成つて生暖かい人
の膝。膝は動いてずつと左へ退く。

『おや、先刻の先生、まだ其處にお在りましたか。是は
失禮様。』

膝の主人は手を頭上に組んで、顔を襟に埋めたま
ゝ頷いたが、相手には少しも見えぬ。

『先生お寝つては良けん。一つ元氣をお附けませ、
猪口が有りません、それ此方の口の附かんのを口
からぐつと。』

書生の頬べたへ瓶の口を斜に押附けたので、酒は
溢れて肩から胸へ、膝へ。

『これは失敬だ、僕は酒は飲みません。』と憤然と

する。瓶の手を引いて、

『は、は、あ、お酌人が悪るごいすか。私が頂きます、勿體ない。』と二息ほど飲んで、

『先生、世のなかあ妙でございすせ、女房が亡く成りましちや酒ですわな。』

次第に湯婆の熱が廻り出す。演士の書生は激昂した頭脳が凜烈たる海風に吹かれて漸と鎮静したと同時に、一種の幽鬱な黙思に沈んだ三時間後の今、だしぬけに此の不規律な酒くらひの友を傍に得て、煩さいとも不愉快とも汚らほしいとも、云ひやうの無い感に撲たれる。さりとて此處を立去る心には成らない、この窓の下には畜生夫婦が小さく成つて居る、夜どほし此處に見張をして、畜生ど

もに一秒間の安眠をも與へぬことの楽しさは、何にまた易へられやう。

じつと又襟に顔を埋めて何事も聞かぬ振。長州辯は益々呂律が廻らなく成るが、氣餒は却つて浪と共に高まる。

『酒を飲みなさらんちふは不憫な御子ぢや。ではまだ女の子のなさけも分るまい。は、は、あ………うむ何んだ、先刻はえらう、先生の辯が廻りました。みんなが手まで拍つて囃した………辯が何んだ。演説が何んだ。私が村の徳山の吉田は代言で、辯は國會議員に成れるほど巧いと云ふけれど、嫁に來者が無いとこ見ると、辯や法律で良い嫁は貰へん。………私なんか十七で、母かたの家調(田租)の千

僕も取れる富限に貰はれたけど、何んの男が家調の餅に掛つて、好きもせん女房の釣鉤に馬鹿な目を見ることか、へえ先生、かわいゝのが一人出来ましてな、先は賤しい石屋の末娘、私は是でも毛利の御支藩の士族、人の口が煩さいから連れて退きましたよ。彼女が一つ下で十六、止めましょ、道行は長うございすて。……で彼女が従弟の縁を便つて、石州の銀山に落着いて、到頭銀山男の世渡りで此の通り、先生、憚りながら鑛山男と飄零れても戀女房は有りますからな。……辯が廻る、演説……そりやあ口先でさ、口先の巧いのは私の兄も巧うございす。兩親の葬式の入用は誰人が爲た。皆この勘當しられた弟にさせといて、二言目には貴様は兄

を構はん。兄者人、兄がそれほど實が有るか。去年彼女が死んだ時、私が泣いた涙の萬の一しづくも兄が落したかい。はゝあ、兄ちや兄ちやも眞平でございす。……先生は御苦勞様な、演説を船まで来て成さるが、私は先生大學は卒業しませんけどね、一人の女房の可愛いゝこつと、酒のうまいこつとは知つてますでなあ。……ちやが、あゝ、その可愛いゝ女房は最早居よらん。』
『最早居よらん。』と急に滅入つた調子に成つて、瓶を膝に抱いて涙ぐんだが、直ぐ氣を取り直して、
『酒ちや、酒ちや。』
ふた口三口煽ると、語氣は遽かに激した。
『さあ、先生も一杯、是非にも飲ませるッ。』

左の手を頸に掛けて、引締めて、瓶の口を口元に當てがったが、

『何んだ厭だと……』

拒むで拒解かうとする利腕を引いて、ねち倒して、片膝を脊に載っかけて、手にした大瓶を逆に取りなほして打下すや、力は鍛へた鑛山男。

『うゝむ……』と一呻吟して轉倒る音。

『はゝ、はゝ、あ。』と笑つたが、これもどさ、倒れ重つたらしい音。さて後は幽鬼海を行くの間か、一しほ増る悶寂。

船は對馬沖を通るらしい。暗い空に、ちらり／＼、音のせぬ魔の撲つ礫のやう、雪が降りだした。

明くれば元日の午前六時、隅田川丸は月尾島を左舷に見て釜山の港に碇泊した。夜半すぎから降り出した雪は、今日の祝ひの爲に化粧した如く美事に船の上を飾つたので、乗客船員舉つて新しい年の吉兆と賀したが、艦の甲板に雪を被つた寢姿の綺麗な酔興の二乗客を、起せども覺せども甲斐なき、大阪府平民學生諸戸清一十九歳、山口縣士族韓國般山金鑛鑛夫頭末永政矩四十二歳の死體と定つた時、船中は更に大騒ぎと成つた。

釜山の日本領事館から警部、警員、巡查が臨檢に來た。醫員の診斷では、學生は打撲傷のために腦震盪を起して事斷れたが、鑛夫頭は大酔の餘りに眠つて寒氣の爲に窒息したものとある。

鑛夫頭の變死は酒の罰と言ひおとして誰も左程に惜ま無かつたが、昨夜の演説を繰返して、船中一同口々に學生の無慘な死にかたを哀んだ。そして當港の領事館員と共に、二つの白木の柩を載せた端艇に乗移つて、男は外套の頭巾に、女は紫絹の洋傘に、互に面を羞ぢて、愁然と護送して上陸したまふ、再び此の船に歸つて來なかつた上等客諸戸富樹夫婦二人に就いては、誰一人おもひやりの有る者が無かつた。

——鐵幹作——

舊人

詩は成りぬ。——曾てはこもまた通り魔が執ありや、羽搏しづかに降り寄り、咀ひの囁き、あなあさまし、口接けてわれ酔はしむと悲びにしか。——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。——曾てはこもまたわが花環、美しくしの地上の王后、稀に君見て、桂は黄金に、百合はしろ銀にぞ造りあやぎぬかづけ密と捧げしか。——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。——曾てはこもまたわが管絃、

君は瑠璃鳥、わが笛に、しばしなづさひ、
君は百合花、わが琴に、しばしそよぎし。
あらずよ、こはまた今も君に奏べて。——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。——歌ふを許せ、ひとつ星、君は明星
あゝ遠く西のゆふべに移り輝く。
われにそむくも、さもあれ、人に行くも
君は美しくし、歌はざらめや、——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。——(そこに世は満つ、失望の
或は涕涙、或は憤怒、われ關せず。)
あゝ君の、よし愛せずも、我とこそ
君愛するに心は飢ゑず。——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。もとより泣かず、憤らず、
(こもはた嬉し、美妙の慈相、君が化導か。)
君をしのぶに心やはらぎ、春の水の
湧きて流るるわが歡喜。——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。——あゝまた憚りの關守、
許せと賂そへ、誰にか忍び傳てしめむ。
鄙調あやにく藝苑の選に入らねば、
讀者は一人、たゞ一人、われとこそ。——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。——こは若し假に玉と響くも、
とこしへ齋きつかふる胸の戸帳、
金碧古りて猶はた燦たる君が繪像に、

題しては唯笑む孤獨の畫讚よ。——詩は成りぬ。

——鐵幹作——

やつれぎぬ

(明治三十七年九月父君のかくれ給へる時)

御葬送りにやつれぎぬ着る中の子を
かへり見まさでよき道おはせ

父ぞ來ます御列むかふる秋の寺つめ
たき廊の敷瓦かな

おもひ子は名しらぬ罪を兄に負ひ御
棺遠き中の間に眠る

母を見ればありし日に似ぬ御髪つき
百二十里を來し父の家

棺にして今前を過ぎ堂に入ると鳴る
鏡鉞の音さへ聞きぬ

父なうて島田に似たる忌留のいまだ
ふさふか末の姉妹

二十四に成れば男とわが言ひし弟の

片頬よく父に似る

あなかしこ兄をうらみの涙さへまじ
ると知らばまどひまさむ道

御棺にあまり泣く子は供許らず萩さ
く徑を母と行く寺

兒を具して召に具されしさくら月足
ると笑ませし御眼も開かぬ

さらば父地の百里は隔てありぬ我家
の笑みを天に見たまへ

七日がたり

この會おもひ立ち給ひしあるじ達彌の君の浮か
ぬ色なるを、十哩に足らぬ汽車のつかれは、白き帛
かけし圓き卓の上の、美しくしき瓶の酒、ちひさき雌
胡に三つ重ねむ時は、常の君と成り給ふべしと、妹
の少女たちは氣にとめぬさまなり。花代は優れて
黒き瞳もてる少女なれど、くせなき髪、豊かなる頬
は、姉の鈴江のものぞと自から羞づるやうなるは、
この休みに種雄を得てしよりなり。されど極めて

愛嬌づきたる聲音は、若き從兄の學士の瞳をして、その都より伴ひこし町田學士を視ふやう爲しめぬ。『停車場へ』と姉は稍さげすむ如く、わが負ひし月曜日を語らむとする花代を見つめつ。鈴江を詰る如き目つきして、種雄はやがて他方を向きぬ。花代は『そは大沼伯爵夫人の都へ歸り給ふを偶然おもひ出でて、他ながらの挨拶もと、水車小屋のかたへ行きて踵を返せしと知り給へ。』『リムも共に』と小さき光代は聲はさみぬ。頷かれて、さも勝ち得しやうに笑むを、達彌はいとしと見るさまなり。『上り列車は早客を載せて後なりき。されば伯母君の喜び給ふ彼の夫人の都挨拶は得持ち歸らざりき。』光代は町田學士に酒つぎやりぬ。『出でむとする

時、かなたの待合室に、わが曾て見しこと無きまで美しくしき人を見つ。『達彌のほかの十の瞳は一つに寄りぬ。』『疲れたるさまにて、彼方むきたる人の腕に凭りかかり居たり。』鈴江『夫人にてや。』『あざるべし。そが中に物言ふらしき毎に、極めて禮あつきさまなりき。ホテルまで忍び給へ、一里には足らじと男の云ひし時、ホテルと彼人の思はずなるべき、高き聲ききつ。やがて紫の傘ひろげられて、長谷の方へは迂路なるべき細道を海邊に行きしまで、われは立ちつくしぬ、あまりの美しくしさに撲たれて。』『中姉上、髪のかたち、衣の色、おぼえ給ふ限りゆるし給へ。』『さきより何事も云はざりし浪江は、膝すゝめむとて、町田學士の團扇に袖かけしを、は

したなしと従兄の友は思ふべしと面赧めぬ。種雄のかた向きて花代、島田と思ひ給ふか。『あらし、君のやうにて。』『わが如き癖髪ならざりしかど。』『早く語り續け給へ。』さながら高きところより女神の物宣り給ふ如しと、町田學士は鈴江の聲を思ひぬ。『衣はさまで眩き物とは思ひ給はじ、紺青色の透矢、井の字がすり。』『井の字がすり。』と達彌は獨りごつやうに妹を見つめつ。『姉君の召す其よりも細かかりき。みどり色の帯は大和錦にや。淡紅色の帯あげ、下がさねは臘脂の絹なりと見ぬ。』達彌はいよ、浮かぬ色に窓のきはに立ちぬ。光代、年は中姉上ばかりの君にか。『われと姉上との間ばかりと見しかど、汽車のつかれ愈えての後のその人を見

ねば。』町田學士はうなづきて『さてその男は。』『男とや、男は見ざりき。帽ふかきのみならず、彼方むく用意の餘りかしこきも憎く、われは唯その美しくしき人の虜となりぬのみ。今は早火曜日かたる人の聴衆となるを許し給へ。』と右にすわれる浪江に白酒つきもらふ。さきの女王のほこりかなる笑みを、種雄美しくしと見入りたり、その次は光代との、前の日曜の午後のだめを、何れも忘じぬしやうに、瞳まろうしぬ。種雄に拍手されて、十三の少女、伯父を真似せし咳ばらひ一つ。『伴なひしはリムなりし。』『言はでも。』と花代の笑ふを、種雄は睨む真似す。鈴江、稻村が崎の鞆へか。『大姉上は能く知りぬますよ、リムは我れより先き松原の芝にす

わりぬ。われは歌ひぬ、中姉上に教へられし歌を。』
花代は姉をしのび見ぬ。さて種雄のかたに向きぬ。
『小姉上、かの岡の下に離座敷ある宿は何と云ひ
し、知り居たまふや。』『この春できし、稻村ホテル』
と小聲に教へられつ。『いつぞや我れは彼處へ行
きぬ、兄君につれられて。京都大學の教授の君を訪
ひになり。』もどかしと口笛ふくは學士なり。『火曜
日を語り給へ。』と鈴江のいらだちたる聲に、光代
は口疾く、『かの歌き、給へと云ふ聲、その垣よ
り洩れきぬ。われは羞かしければ歌ひ歌めつ。プラ
ンコに乗りぬ。高くあがりし時、リムにわが誇るべ
くリムを見むとせし目は、美しくしき人を見ぬ。椽に
腰うちかけし一人の人は、美しくしき人の鬢の毛な

でやり居たり。その髭ある人、誰なりしか見し人の
やうなれど、よく覺えず。二人とも、いつぞや兄上、兄
上の三橋の湯にめして後借り給ひしやうなる浴
衣ヌイなりき。われは其よりひと時ばかりリムを抱き
て轉寢きつ、日かげの松が根に、そは毎日の例なれ
ば。』浪江は姉らしげに微笑みぬ。光代は落せし團
扇を無心に拾ひて、『われは兄上の話しに聞きし
女神の歌ひ給ひし如き歌聲に目ざめぬ。かの座敷
よりなり。中姉上、中姉上より吾がならひし歌、わが
ひと時まへ、歌ひぬし其なりき、歌は。』火曜日のち
さき少女は、そのはればれしき睡に一座を見わた
して、次は町田學士ぞと云ふ。學士『われは最はづか
し、されど許し給はじ。』鈴江』もとよりなり、花代、光

代の話をだに聴き居しを。』こはこの大姉上の性質なれど、種雄は花代を數へられしに、われら二人を辱しめられしやうの面持して、下を向きぬ。學士『されど餘りに趣なし。われは彼の若き博士の、過ぎし夜あわてゝ秘めし文がらのこと思ひ出でしかば、強ひても其に趣味もちて訪ひぬ。』種雄『時岡を』學の講師。』と笑ひつ。『されど博士は在らざりき、不幸なる水曜日なり。』種雄も高く笑ひつ。『されどまた甚だ幸なる水曜日なりき。種雄』甚だ幸なる、歸るさに圓覺寺へ廻りて禪師や在せし。』あらず、在せしは夫人なり。われは彼の高慢なる博士の夫人と語らざるを得ざりき。』領きしを、大人ぶりな

りと學士の思はずやと、浪江は桔梗の畫その色にて書きし絹扇の小さきを、ひらき、すぼめなどして紛らさむと力む。白き絹とり出で、襟ども拭く鈴江ぞ心地よげなる。達彌は心地少しや直りし、はた可笑しかるべき學士の話に憂さやらむとや、此方に歩みて花代の右の椅子に倚りぬ。種雄は林檎むかむとする光代に、われ代りて小刀とりつゝ、『博士は何處へ行きし、彼の夫人と離れて。』『大磯なる不破教授の病を見舞ひに行きしは一昨日と聞きぬ。』『殊勝』と種雄はむきはじめつ。巧みなる手つきに、さくさくと音して、繰られたるなめし皮の平緒と見ゆる皮は、中膝に長くも垂れぬ。椅子のしたよりじやれつきしはリムなり、何時の程にか聴衆に

は加はりけむ。暑くろしと鈴江は厨夫よびて引き出させつ。『殊勝なりしはわれなり。彼の夫人の前に、二時間ばかり。終に堪へがたく、われ昨日より腦のわるきよしを云ひぬ。早川家にありては思ひわづらひ給ふ事おほかるべし、君わかきいませば、又あまた若くいませばと云ひし時の、彼女が面ぞまこと憎かりし。』鈴江の顔には、なかなかに矜らしげなる笑みの溢るゝなり。『さて捨ておき給はゞ悪ろし、薬まるらせむと立ちて、儼おほく載せし棚の前に椅子うつして、茂春の量にて宜しかるべしと首かたぶくる薬師劑に、われは面そむけぬ、無禮げなる笑ひを見せじとて。』『その薬のみ給ひてや』と氣づかはしげなる小さき姉に『學士はもとより

健やかなる君。』と、光代は説明の勞を取りぬ、『君の座禪力も我慢しがたかりしか』と種雄は笑みて林檎を勧めぬ。花代は『おん幸うすかりし水曜日を弔しまゐらせむ。』と葡萄酒の儼とるに、學士は杯ひきて、『藥劑師の君、今日はやつがれ重體なり、量おほくして例の合薬をこそ賜らめ。』一座は笑ひくづれぬ。達彌も思はず高く笑ひて、厨のかたにウキスキを喚びぬ。浪江『われは木曜日の夕に時間博士を見たりき。』『待ちたまへ。』と學士は種雄を見かへり、『彼の藥劑師の誕生日に招かれし日の朝、博士は歸りこしと聞きしにあらずや。』種雄は林檎ふくみたるまゝ『如何やうにても可し。』浪江『彼の水車小屋の後ろにてなりき。われは小屋の

片眼しひたる少女と語らむとて行きしなり。』は
したなしと思ふ心地に、鈴江は眉ひそめぬ。『少女
は使にゆきしなるべし、人なき小屋の火かげに吾
は小猫と遊びぬたり。しばらくして水の音する中
に、人のさゝめく如き聲を聞きつ。』詩の神を恭うやまひ
て、神秘を信ずる子なればと、花代はその清らなる
額髪を見つめぬ。『唯そこと思ひ給はずや、こは女
の聲なり。男、しかり、月も海のさまも唯かゝる夜な
りき、われは君のものとなりしかな。水は一しき
りはげしき音しぬ、風の稲葉こえて添つひしなり。又
きこえしは男の聲、東への旅を更へて西へあくが
れよりし春を、君はなど物足らず恨めしげに爲た
まひしや。女、さはのたまふな、一月にとちぎり給ひ

し後の三月、あらず七月の長かりしを思ひ給へ。水
車のひゞき高くなりて、このたびは久しく止まず。』
學士』その夜のおん家いへ菴は長きおん作なりしなる
べし。『鈴江はおもしろからぬ面持なり。』女の聲に
てこの度はかすかに如何にもして外まながらにて
も見たし、わが命と見る手篋の文のなかなる丁ちやう子、
なでしこ、生ひし、生ひたる庭なりとも、君せめて許
し給はずや。男、そのむつかしき母の怪しみ惹きて、
われらが戀の危くなるともとや。餘りに大人おとなげな
し、幼なき君なり、泣き給ふか、愈々大人おとなげなし。女、わ
れはげに幼なし、されど一夜が中に白髪しろかみもよほす
も少女なり。幼なき者の言葉は聴き給ふべきもの
ぞ、いかで我れを他の子と偽り給へ、さて明日の母

君のうたげの庭に延き給へ。男、心しづめ給へ、しかくさわがしく取みだすは、さるからだの人の常なれど。女、われ強ひて紛れ入らば何としたまふ。女の聲は美しくしけれど、甲走りてひと際高かりき。『光代』小姉上、そは男や負けたる。『否、その後の聲は聞かざりき。この度は水の音のさはりならず、その聲の次第に遠く歩みゆきしと思しかりき。われは小屋の少女のあまりに遅ければ、猫にいとま告げて其處いでぬ。知りおはすや其處の土橋。』さきより我顔のみまもらるゝが羞かしかりし學士に、かく云ひし少女ぞかしこき。『よく知れり、光代の君に伴はれて。』浪江はうなづきつ、『かの橋わたらむとして、向岸の松かげに我れは時岡博士を見ぬ。涼

みに出で給ひしなるべし、浴衣を着けて、團扇とりて、その縁ひろき白の帽は誰が目にも博士と著かるべし。今一人かなたの低き田の畔に下りかがみて、笠とらふる人のありしと覺えたり。『疲れ給ひしなるべし』と花代はねぎらひぬ。額の汗ぬぐはむきぬ、袂に求めて得ぬさま見て、町田學士は我手なるを禮して浪江の膝におきつと見るより、かなたの鈴江の投げこせしかた疾かりき。厨夫の運びしアイス、クリムは、洩れなく人々の前にゆきわたりぬ。匙の音のやみし時、種雄、金曜日とある招待状は、博士の門弟、否親友なる町田學士の手を経て授かりつ。『學士は馬鹿な』とひとりごちぬ。『その親友の君におくれて、かの玄關に立ちしは正午と五

分前なりき。』『こまかし。』と學士は手拍たむばかりなり。『否、われは彼の家の内を語るまじ。大磯ばかりの汽車の疲れ云はせて賓客の前に出でぬ主人や、彼の妻が我等を少年の如く思へる挨拶ぶりや、八幡宮の祠官の銀行設立談や、それら語るを好まざれば。されば彼の門に入るまでを語り侍らむ。』『それは今の流行雑誌を評すると同じ手段なり、妙いでやその表紙畫と口畫とを聞かむ。』學士はまた斯く挿みぬ。『聞きよく語り給へ。』と鈴江の云ふを、種雄は聞かぬさまなり。『師範學校の横手、博士の別荘の前なる木槿垣の横にて、我は女に呼びとめられぬ。口つぐみぬし達彌は女に逢ふえにし多き週間かな。』とつぶやくやうに云ふを、花代『美しくし

き君になるべし。』鈴江『あらじ、彼のあたりは物乞ふやから多きに。』種雄は苦笑して『まこと美しくしき人なり、衣は覺えず、夜會に百合の白きかざして。』花代『もとより知りておはしけるなるべし。』『否、君の知らぬ人なれば我れの知らぬ人なり。博士の宴におもむき給ふ君かと、つつましげに云ふ。』『妙、いよいよ妙。』と學士は椅子と共に後すぎりして笑めり。『御身もかと問ふに、さならねどと愈々伏目に成る人は西の國なまり。おもてだちてならで御庭へ入りたき者に侍るがと云ふ。さらば夫人の知るべにゐますやと我れは問ひつ。否、老夫人に仕ふる人に聊かゆかりある者にて。老夫人、われは思はず打笑ひぬ。老夫人とや、いしくも云ひ給ひし、二十

五にても彼の夫人こそ老夫人の名もため。かく云ふに、その人、二十五の夫人といぶかしげなり。われ、然り、博士の夫人なり。その人かさねて、時岡博士の夫人とや。われ、然り、二十五の時岡博士夫人。君はまだ逢ひ給ひしこと無かるべし、博士とて三十二の壯年なり。ともかくも來給へ、ともなひまゐらせむ。かく云ふに、遽かに涙ぐみて、われは驚きぬ、無禮げの罪は許し給へ、わが訪問は又の日に爲すべしと、まことその女は斯くて愴愴しく消えしなり。『光代』氣のふれし人なるべし。『鈴江』さる狂氣の人と語り給ひしとや。』注ぎ給はれと花代に乞ひし酒のみほして、『わが對手なりし山川子爵の妹の桃色の服の爲めに疲れし目醫さむとて唯ひとり庭

に出でし時、思はずも木立のなかに前の女を認めつ。』學士は手を組みて『謹聽』と叫びぬ。『否、諸君は失望に終れり。認めしは確かならず、その美しくしき人のまぼろし、わが身に添ひゐしなるやも知り難し。花代は目に少し光り持ちて『今もか』と云ふ。』然り、今はそのまぼろし、君と一つに成りて。』金曜日の君のたくみなる詞かなと、浪江は口のうちに獨りごちぬ。鈴江は妬たかるべし。鈴江『われは海邊のおもむきあるを選びたり。』はかばかしく答する人もなきに、間のわろき面持して續けぬ。『されど月はもとより、星とても無き夜なりき。』光代『さらば小姉上の「磯の暗夜」のやうにか。』浪江はひそかに町田學士を見ぬ。種雄『いかに彼の詩を歌ひ給はずや。さ

らば大姉上が叙景の詞たすけ給ふこと多かるべし。』學士も『われもまだ知らぬは其の御作なり、今日まで。』と云ひて、伏目になれる作者の耳もとに、『さかせ給へ、いざ。』作者『ゆるし給へ、以前の作なれば。』あまたに詞はさまれし土曜日の女神は、いと不興になりて、『われは早語るまじ、この席に要なき身なり。浪江女史が詩には、そこに髪ふり亂したる若き女の、岩に額もたしたるも見ゆるなるべし。われは要なき身なり。』と簾障子荒く立て、此室出でしと思ふ間もなく、己が居室にて下婢よぶ聲けたましく聞えぬ。光代は我れより出でしこと、小さく成りて、姉達の面を覗ひつ。達彌は『渠の癖なれば。』と微笑みしが、學士は目を圓くして黙し

ぬ。種代と花代とは相顧みて苦笑したり。更に伏目に成りし作者の姫は泣くなるべし。しばし口開く人も無きに、達彌は浮かぬ顔の、一しほ重き唇に、『今はわれの順なり。』蘇生せる心地に、光代は兄が好む蕉實を割きて、硝子の皿にすゝめぬ。『われは今朝逗子の海岸に悲惨なるものを見き。かくて我れは其を諸君の前に語らざるべからざるか。』云ひさして、云ひ知らぬ不快の色は面に充ちたり。同情の熱もちし種雄の瞳みつめて、『君は我が亡き姉の戀、その生涯、最後をも知り給へり。されど、その時はわれ猶をさなかりき。そこに灰となして歸り給ひし父上母上の御面に、無限の悲しき色を認めまゐらせしのみ。』種雄は堪へがたきさまにて、達

彌が肩に手を掛け、『ともに在りしは我れなりき。その憎き貴族の子殺しに往かむと二人していきまきしも。』一座は水を打ちしばかりに静かなり。五町が程なる七里が濱の夕の浪は、人々の心臓の鼓動と共に、おなじ律格もちて手に取る如く響けり。達彌『われはその海岸に、かなしき姉を、再びまのあたり見る心地したり。井の字がすりの衣きし美くしき人なり。その亡きがらも身ごもりて四箇月ばかりと、多くは聞かぬ、漁夫どもの言葉ぞあさましかりし。』光代も泣きぬ、花代も泣きぬ。學士は物も云はず、彼御寺に行きては爲る如く、椅子の上不足くみて、手を膝に目閉ぢたり。しばらくして其室洩れしは、種雄と浪江が『磯の暗夜』を、低き調べに歌

ふ聲なり。

—晶子作—

橋媛

龍神うろくづ海のつかひ女
肩さし手さし供奉しまつるは
菅だたみ八つ皮だたみ八つ
敷へおよばぬ帛うはだたみ
三重の御輿に花とこぼれて

赤の御袴ましら大御衣
おん正身のみじろぐたびに
小波わきて飾る黒髪

潮の音こそ四方には通へ
前追ふ魚が頭頭の
瑠璃の燭を吹く風も有らねば
水晶に描く是れや蒔繪か
大わだつみの底の御啓
時に金色上より曳きて
清しきひびき最も瑿を
星の七つぞ深く落ちくる

『美はしきもの悉ねたむ
いまし龍神おそれ思はず
やまと美童の大皇子奪ると
相模の海や走水の海
巨浪ゆすりて詭計りけりな
犠牲に汝が獲し弟橋は
光環かざす天の幸姫
清らの戀のいきみすだまよ
星の御座へいざ疾く具せむ』

天の使に御手とられまし
いま上げませるおん容顔や
『相模の小野に燃ゆる凶火の

火中に立ちて問ひし君はも
とぞ御涙この界に一つ
熱く落ちぬと落ちぬと見しは
あなや刺櫛珠の刺櫛
櫛に尾を曳き星は昇りて

二

天さがる鄙の上總に
藻をかづき勇魚とる男は
天がした今さわげるも
よそに聴く安き伏屋よ
めざむれば海は和ぎたり

はしぎやし美しくし妻の
昨夜磯に得たる刺櫛
床に敷き寝ねてし夢よ
上臈や星や龍神
めづらかに尊かりきな

あな愚け此櫛こそは
昨の朝七日七夜を
御方の御裳の端だに
得ばやとて相模七浦
上總潟長柄の邊にも
寄らずやと尋ねわびたる

經向の日の宮の
御舍人が詞の御櫛
さらば妻帆岡の方に
御軍の跡を追はまし

— 晶子作 —

金蓮花

おぞのものみづから病ますおちいら
す知りたりげにも人を罵る

あめつちにたゞ二人なる戀もせむひ

168

169

がみて怖ぢて人に墮ちめや

はらからの嫉みの神もさうぞきて戀
の春笛とりて來ましぬ

なになれば名なき野花のうらがれも
わがはらからの傷みに似たる

或はふとおもかけ追ひてはて知らず
或はわびつゝ土にぞ歸る

おそろしき老女の巫女が呪の口もわ
が口ふれて笑まむとし思ふ

さすらひは命いのちにすくふ火くひ鳥もぬ
けぬ枯かれぬうらわかき身は

すたれてはおもかけ恥づるふる壁かべ書え
おもふに足りぬ我のあすの日

あめつちに身をひくうしてぬか伏せ
て在りは在り得めさびしきものを

君をしもそこにうかひ稀に見る戀
の窓なる美しくしの夢

亞弗利加の大野と我のかたくなとこ

の古きもの能く美しくしき

むらさきの長きふさ緒にくるひては
鷹がこぼしゝ紅梅の花

麥の香や初雷はつらいわたる青潮あせなみや君と耶麻やま
土との眞夏まなげに別る(同門久保猪之吉の獨逸留學送別會の席上)

まくらべに足に紅百合ましろ百合兒
が眞裸まいただかの涼し夏床なつど

青潮や出でし眞玉やぬけてこし我兒
といます小さきおん神

輝やかにわが行くかたも戀ふる子の
在るかたも指せ黄金日向葵

寂寥はわが敗れこしふるさとかあな
憂と云ひてはた慕かしむ

反響して真洞に走る山姫の衣すれと
聴く木下そよかせ

西山に俳句する翁米はなし白梅そへ
て乾鮭（人々と字を結びての即興。魚の名）まゐる

山毛櫛（下）に烏瓜なる下二尺青空透きて

172

富士のぞむ宿（青）

173

しろがねの緒よりか君が歌よりか今
あめつちは光いわたる（光）

戀しらぬ神かな胸に手ふれては炎（火）の
海の音と云ひにし（海）

底しらぬ真洞（洞）に根ざす黒雲の渦（渦）巻く
なかに我眼は閉ぢぬ（雲）

何なれば草のひと葉を笛に吹き獨り
愁に泌（し）みて泣かる（笛）

牛飼がわかき愁を誰れ問はむつなぎ
し牛に秋の日さしぬ(牛)

あたらしき生にわが得し玉杯の歌は
この日も盛るや歡喜(新)

詩や戀や黄泉の闇戸の彼方なる枯れ
し骨如しわが興冷えぬ(骨)

君に別れ長き別れに身は老いぬわび
て二夜を経ぬる千とせに(想)

さづからず我とわびぬる我なれば死

ぬる怖れじ石にもたれて

われとこそあこがれしめよ燃えしめ
よやらし巖屋に行かじ氷室に

胸ひたし潮と湧けよなさけあらば破
れにし船も琴と響かめ

遠き世に君をひらけとさづかりし鑰
にはあれどえこそ見出でね

秋の夜

しら木素琴のわが琴に
古りし千載を招き寄せ
瘦せて悼みし歌二聯
秋の火かげに弾すれば、
破滅、憂愁、呪咀らが
怨霊こそりあらはれて
毒吐く舌や火吐く舌
琴柱をわたるむせび泣き。

こたびは若き戀びとが
水うるはしさ花園に

くちづけ甘きよろこびを
唱歌に代へて弾すれば、
琴槌を出づる上臈の
素肌羞づるや火を消して
ひと室ことごと蘭の香の
黒髪にこそ成りにけれ。

— 鐵 幹 作

こぼろぎ

(人々と夜を徹し字を結びてよめる中より)

ほととぎす玉をまゐらす瑠璃盤るりばんに羅ら
のおん袖の觸れにしものか

こほろぎ

胸むねにのこる誰を喚べとか或るふしは
晝蚊帳あしがやの君に遠き蟋蟀せせり

火

わが胸は潮うしほのたむろ火の家とあまり
あらはに人戀ひ初めぬ

帆

松前や筑紫や室のまじりうた帆を織
る磯に春雨ぞ降る

座

君待つと眠れる土に櫻ふれ天あまにねが

はぬたふときおん座

のろひ

日に夜に尺をちぢむる髪ひとすぢま
ゐらすものを咀ひと云ふや

朝

朝の人は京うぐひすに夢やろと兩戸
のひまに比叡を見出でし

氷

石を父に氷を母にうまれにし我と昨
日は知らざりし幸さい

晝舟

岩かげの四尺やすかる晝舟ひるふねやわか枝えだ
のうらに眉かきし君

鷄

山吹のとなりになる、鷄の子が歸り
路わぶる春の朝雨

なでしこ

わが君はなでしこ作る垣根すみ雛の
殿にや、高き家

山の岩

奥しらぬ洞ももつべき山の巖神秘の
御名を今ひとつ知らむ

古事記

みかど知らず古事記しらすのやまと
人をレモン咲く野に放たせ給へ

狹

闇の夜の御肩に袖にちるや梅路ぬか
るみて狭き曾根崎

うすねすみ

ゆく春を白檀たきし母がすさび御叔
父法師がうすねすみぎぬ

終

終の世とも才のはてともむくろとも
或るは見たまへ寄るは君が手

細眉

ねがはくは細眉あげてわれほめの聲
よき歌に浄まれ此世

壁

誰が筆か王者が殿の御壁書にかたち

と才の全またき我れ見む

—品子作—

鳴鏑

(源九郎義経の戦功を歌へる)

(上)

此處は津の國住の江、
深海の青和あなに
浮鳥うきどりねむる春の日、
磯霞いそがきほのぼのと

籠めたりや大やしろ、
松にまじりて緋ざくら
珠たまざくら、藤の花さき、
御階みかめぐりて山吹
橘たちばなの葉、
神水かみづに
紺青こんじやうの陽炎かひりょう燃えぬ。
さても荒涼あつらうまじ世の中、
三年さんねんの兵亂へいらんに
やすき暇いとまも無けれや、
狩衣かりぎぬに繪えを競あそひ
檜扇ひのあふぎに蒔繪まきえ打ち



公卿、公達、宮媛

磯ゆする宴遊も絶えぬ、

秀歌一首の禱りに

七夜の参籠や

うらぶれて

瘦せたまふ風流も無し。

ちかき難波の浦には

このたびの催しに

馳せ遅れたる源氏等

面猛のおらえびす

聲高に船は喚べ、

院の幣帛さゝげて



公卿公達宮媛
磯守する宴遊も絶えぬ、
秀歌一首の船りに
七夜の参籠や
うらみれて
覆せたまふ風流も無し。
もかき難波の浦には
このたびの催しに
馳せ遅れたる源氏等
面猛のおらえびす
登高に船は喚べ、
院の暫く船さへげて

追討の祈願満ちては
あな無聊らの彌生や、
宮司も伶人も
うつらうつら
永き日を倦んじ睡りぬ
あたり折から暗がり
真夜中の光景して
しづかに渡る松かせ、
一百の燈籠に
灯は入りぬ星のごと、
大御田植うる式事か
采女等の唄も聞かぬに、

御輿洗ひの祭りか
勅使もおはさぬを、

何なれば

時しらす灯はたてまつる。

あら、ひんがしの空より

しろがねの轡の音

蹄のおとこそ近づけ、

鹿島より三島より

明神のふた柱

ましろき翼の神馬に

白髪垂れ並び來ませば、

「いざたまへや」と内より

微妙のおん聲に

おのづから

つと啓きぬ金の御格子。

今、寶殿のおん上

青銅の燈臺に

松笠細う燃えたり、

天の井の水のごと

澄みわたる眞鏡に

三つの御像映りて

梅花のおん衣似たりや、

現人神の打解け

ざればみ、翁さび

ほがらかに
語ります事の畏き。

『あるじの翁も知るさめ、
法皇の願文の

こたびは痛う切なり、

いかにぞや議らまく

遠乗りのりに斯くは來ぬ、

敵は手強ての者かな

入道の歸依きに感かされ

熊野の神や紅べにさす

龍女の嚴いづく島

西の海

悪龍を集へて護りぬ。』

『げにや年頃淺慮せんに

事このむ下座げの神

あまた方人かたしてけれ、

王法わうは衰へめ

神力しんの落つべきか、

心やすかれ、筑紫の

宇佐が守る源氏の巨人

義經こそは優曇華

玉の樹、光る枝

めづらかに
末の世の一の將軍。

過ぎける後の二月

この國の戦ひよ

語り出づるも忌々しや、

三草山、一の谷

要害の城がまへ、

九國、中國、四國ゆ

十萬の精兵つどへ

人天を呑む勢ひ、

海には讃岐渦

屋島より

いくさ船沖を掩ひぬ。

味方の軍は五萬騎

昆陽野より二里がほど

しら旗雪とまがへり、

宵ごとに増りゆく

兩軍の篝火は

日本武の少子が

東國のえびす迎へて

焼津が原に火を放し

火中の亂兜

麗はしく

笑まひけむ其世に似たり。

大手の將は範頼、
義經は搦手に

鴨越を落しぬ、

鹿だにも越えわぶる

荒山の悪所

四十五丈が懸崖

千萬の大鉦伏せて

苔被ひたる如くや、

奈落の底見れば

一の谷

ほのかにもひやく貝が音。

人々わけてその時

真ッ先に手綱とり

大將軍は呼ばひぬ

「鹿すらも踏むところ

など馬の躰えざらむ、

大炬火は今ぞや、」

「心得て候ひぬる」と

古山法師辨慶

杉生に火をさせば

迦具土の

宮のごと山は燃えけり。

大將軍は微笑み、

「時はよし、ためらふな

馬の尻足しかせよ、

一心二に手綱

三に鞭、四に鎧

四つの義あれど全くは

心もて乗れや、いざ先づ

わが爲るやうを手本に

つづけ」と鞭を揚げ

うつぶしに

風のこと流れ落しぬ。

後ろの火の手、鳴響や

御空とぶ修羅王ぞ

源氏を引きて來ぬらし、

防矢に汗あへて

戦へど平家がた

大手破れし夜討に

搦手の奇兵は添ひぬ、

真晝の潮も退く頃

屋島へ遠負に

落ちのびし

そのさまの哀れなりしか。

さてまた今年正月

四國路の戦ひを

少しばかりや申さめ、

先づ初め難波津に

船ぞろへ評議あり、

梶原平三景時

言ふやうは「軍の仕度
逆櫓の船は如何にぞ、
進むも退くも

船いくさ

かけひくに自在ならまし、」

ほくそゑみして、義經

「鎌倉の侍に

卑法の輩も有るよな、

このたびの追ひ討ちに

亂逆の亡びすば

鬼界、高麗、天竺

龍宮の邊、阪も漕ぐべし、

あな忌はしの逆櫓や、
逃れむ用意して

陣に立つ

梶原は賢かりけり。

兵衛佐の代官

日本の將軍と

不肖なれども唯われ

敵を見れば迎へ討ち

勝たむこそ心地よき、

かねて命は惜まず

武夫の名のみ思ひぬ、

わが言忌まば人々

平三を大將に

百二百

逆櫓押し去ねや東へ。」

折からすさぶ颯風や

かき曇り氷雨して

浦浪空に吹き揚げ

百艘の大船も

片時に摧いたり

義經「あはれ折よし

帆を張れ」と喚べは、櫓取

「かゝる荒らびに不信や

御船をいかがせむ、

劫風に

怒ります龍も來て乗れ。」

「下司等に物は言はせな、

荒海ぞよかなれ

順らば敵ぞ知らまし、

龍の背も渡せや」と

將軍の濃き腫、

伊勢三郎突ツ立ち

「下知きかぬ櫓取射ん」と

大の滋籐しぼりて、

雄たけび脅かし

船ごとに

馳せ廻る鬼神の姿。

「あはや一定死なむす
矢おもてか海原か

さは海原を擇べ」と

究竟の櫂取ら

髻髪を切り放ち

有るが中にも將軍

畠山、土肥、和田、佐々木

五艘が船の纜綱

亂音に呪文して

解いたりな

「御空へも吹きもて往け」と。

醜の黄泉の女神が
千萬の鴉羽を

國の境に剝ぎ掛け

くらがりの底にして

死靈等の呻吟くごと

眞闇の海のすさまじ、

目ひとつの雷の化鳥が

腐れし骸に寄ること

先追ふ船にのみ

唯ひとつ

篝火は青に照しぬ。

剛なるものはをかしゃ、

さばりの荒海も

五艘の船の亂れず、

神將の馬のごと

疾風に駕りたれば、

三日の船路を三時に

阿波の國あまこが浦へ

夢のやうにて寄せたり。』

言ひさし氣色ばみ

大神は

垂らし髯撫でましけるが、

三柱ながら耳たて

』にはかにも宇佐の宮

こは何事ぞ、さわがし、

興ふかき世がたりに

思はずも時經つ』と

きと見放けます眞西や、

『戦ひは閑なるよ

あら義經の危し、

いでいで宇佐の方、

力添へ

助弓に遠矢は射らむ。』

『強弓取は我こそ』と

眉しろき大三島

會釋ゆゝしく、古へ

香具山の真金とり
白鶴の羽矧ぎし
天の眞寶生征矢、
瑞弓に手握り持たし
御足ふんばり射ませば、
黄金の鳴鏑
嚙々と
光明曳き西を指しけり。

寶殿ゆする響きに
宮守の夢さめて

『末法の濁世にも
日はたそがれぬ住の江、

あらたかの神慮やな。
院にこそ疾く奏さめしと、
萎へし衣裳も着かへす
あわてし大宮司
桃尻に
京さして騎ち上りける。

(下)

彼方は長門の壇の浦、
筑紫の山を見はるかし
流れ急なる青潮の
渦巻き立てる荒海に、

今日を一期と
死ぢからの平家や。

熊野法師の二百艘

松浦黨の五百艘

九國、南海、中國の

勢あつめたる五千艘、

龍の吹く追風に

阿修羅の攻鼓

朝六つよりの戦ひに

勝ちに乗りたる車陣

浮足たてる三千の

源氏が船を夾み撃

兩軍の矢叫びに

瀧なす濤湧きぬ。

あはや負色見えたるに、

紫裾濃の鎧きて

鍬形うちし星甲

弓杖つける軍將の、

船頭に打ッ立ち

若げなる眼を閉ぢて、

いかに八幡加護あれしと

禱り擧げたる折こそあれ

銀泥ぎんじしたる弓上ゆきかみに
舞まへるやうにて降くだれるは、
眞ま白しろ羽はの輝てるり映はえて
美うはしき二羽ふたはの鳩と。

また観みてあれば一ひと旒たなれ
宇佐うさの方かたより虹にじ雲ぐもに
白旗しろはたこそは天あま降くだり來くれ、
あら又またさらさらに東あづまより
青空あおぞらを劈つんざく
金色こんじきの鳴なり鏑かざら

兩軍りゅうぐんこぞりあれあれと

まのあたりなる靈瑞れいずいに
勇ゆうみ立たつては源氏方げんじかた
盛さかりかへしたる勢せいひや、
折をからを颯さとばかり
吹ふき變かはる追風おひかぜ。

怖氣おそけ立たつたる敵中てきちゆうに
大関おほせきあげて入りぬれば
こは叶かなはじと阿波あまの國くに
成良なりよし勢せいが五百艘いほひゃくぶね、
平家へいけを裏切うらぎりし
逆さかしまに攻せまめ蒐かる。

勝敗今は地を換へて
入り亂れたる大いくさ、
くれなるの旗ましら旗
海に揺らめくありさまは、
桃さくらこきませて
鏡にや散らすらし。

「平家榮華の一門も
今は斯うなる世のさまか、
後世妄執の腹愈に
義經にこそ組むべき」と、
敵がたの一の將
能登守教經、

鎧の袖をちぎり捨て
甲脱いだる大童
身を軽々と認めて
長刀ひさげ覗ふは、
この世から、おそろし
鬼となる面がまへ。

此方の船に打入れて
あな危くも寄り添ふに、
早業まさる義經は
二丈ばかりの彼方さま、
敵がたの唐船へ
飄とぞ飛んだる。

黄金づくりの唐船に
紫引ける幕の内
「こは御座船よ」白綾に
白袴する二位の尼、

敵將の亂入を
「狼藉」と打とがめ、

おん眼圓らに額白に
御歳八つなる帝王を
「この青浪の底にこそ
安き宮居は候へ」と

かき抱き、あなかしこ
わたつみへ入れまつる。

逆巻く潮の中なれば
救ひまつれと騒げども、
いかがはすべき、あはや又
女院もつゞき入りますを、
氏も無き雑兵の
熊手に引き上げて、

彌生の末の藤襲
十二單もぬれそぼち
白鳥なせる御頸に
鹽たれ靡く黒御髪、
あはれ知る軍將か
義經も泣きにけり。

漕ぎはなれたる彼方より
有るやう見つる能登守、
「世は是まで」とさし磨き
一門宗徒打つれて、
刺しちがへ落し入る
血けぶりの浪がしら。

ああ戦ひは定まりぬ、
「怨敵今は亡んだり
代々の源氏の精霊も
降りたまへ」と舞ひ躍り
西海の入口に
同音の勝関や。

母の文

拾二日
また行違に相なり候。七日の夜は蒲原様國木田様
と共に澁谷の村芝居に御伴はれ被成し由、焚くら
むの篝火の光、御堂の棟を右に曉色出して、三角四
角の棧敷の屋根、後禊子の蕙洩るる和かき、譬へば
暖室の熱りの如き光と共に成りて、末を黒き松木
立に流せしとの、先づ槐樹並木とやらの夜道のさ
ま、提灯は御持ち被成てか、御前様の事ゆる其御手

煩はし居被成し事とも思ひ申し候。芝居は郭公の
なりし由、舞臺、棧敷、投纏頭の状委しき其母は坐ろ
く三十年の昔祖母様の御里の三日市へ盆正月
の御歸りに伴れられし當時を憶出でられ申候。我
叔父に當る角谷の御じゆんさんの御祖父様なる
人、箱根山の外題に勝五郎御勤め被成て音羽屋々
々の呼聲轟しかりし可笑さは、殊に能く覺居り候。
我等五人の女同胞、春秋の棧敷に村の人、大坂の流
行の彼れぞを知る由。母様に差支ある年の初日の
翌朝、角谷の嬢様なせ歸らつせぬとの二度三度の
早使ひ、それと知りては母様誘す我、其様の芝居見
たきにては無けれど、山一つ此方の長野のはづれ
の例の茶屋、迎の叔父様先づ嬉しく、廣い邸に栗柿

の秋ならば、殊に嬉しき物が有りて、御祖父様御祖
母様の御饗應、母様の舒々した御顔遊す事、近所の
誰彼より堺の御寮人様御嬢様への贈物の數々、
其外にと數へなば未だく候ふべし。何時の年
なりしか、せがむ姉妹に母様御泣き被成て、其様に
云ふものならず、我とて行き度きものをと、御氣の
毒なと兒供心に思ひし事迄憶ひ出申し候。倍とや
我事此頃は毎日尼講にて方方へ招かれ、少しは淋
し心地が忘れらるる様に候。さ候へど御馳走の御
土産の包、車の下へ來て受取りて嬉しがり被成し
御前様を思ひ候ては、御佛壇への挨拶より先、正體
無く成り候事も御坐候。留守の時は臺所の締に別
家の阿歌が參り吳居り候儘御安心可被成候。父上

事二番種蒔きに正月に朝顔咲かせむと霜の白い朝もの水かけは去年の事、今年は何事にも物倦氣に被成しやうに見受參らせ候。少し御瘦せ被爲候ひしが、御酒飲む人の年老いては瘦せる方が良しと竹村は申し候儘餘り御案じ被成まじく候。されど御氣が短く成りしには定七初め皆々困居り候。内に御出被爲し頃は、里よりも派手なるを好みし御前様、此間送りし羽織を荒き様とは、御前様此頃いろいろの事に御寔れ被爲て、心までじみに成りしにては無きかと阿歌に話申し候處、御内に御出被爲し頃は結構で御坐んしたからと泣申し候。我事も些細の事にも涙ぐまる様に成り候。細々と書て御寄越し被爲し山川様の御邸や御庭、二夜程

夢に見申し候。彼方定めて美き奥様振に御成の事と母は羨ましく思申し候。竹村の省吾と芳子が遊びに參り候まま筆とめ申し候。御からだ大切に風引かぬ様成さるべく候。

拾六日

取急ぎ筆とり申し候。母事何も變り無く候。御前様にも似ぬこと夢には色々の有るべく候。御前様にも似ぬ、もう御泣き被爲まじく候。御前様は幾つと御思被爲候や、夜中此方彼方の間毎にランプ明う點させて、晝の様にして、夜明けなば何なりと思ふが儘にして遣らむと、御言はせ被成し由、その様のこと言はせまつりて宜しと御思被爲候や、母

は御氣の毒にて致方も無く候。定めて其夜御前様
よりも泣て御出被成し事と推せられ候。小兒が夜
泣する時は若き母も共に泣く者に候。夢に成りと
も母に逢ふ事出来しは嬉しと御思被爲が宜しく
候。此頃は何時も斷續にて夢にとて能は話がたき
母は、羨しとさへ思ひ參らせ候。返す返すも母事何
事も無く候。御言ひ成さる通、宵に其様な歌詠んで
御出被爲しが故なるべく候。一週間程むかしの様
にして居る事が出来るかと、御前様御問ひ被爲し
に有るともと母申し候由、一週間にても一月にて
も幾等も有るべく候。春は春はと思ひて母は日を
送居り候。からださへ太切にして居らばと病身の
母さへ思ひ候。逢に來て車に乗りて歸りしとの母

は、まだ斯くかたはに似たる身となる迄の母なり
し事と存じ候。此脚昔の儘ならば、夢ならず、今日ま
でに今日までに我事逢に往し事なるべく、今から
とて往かるべきをと思ひ參らせ候。御前様くれぐ
れも最う御泣被爲まじく候。歌のふみ同封致し候。

貳拾五日。

御前様はひまに候べけれど、母事は其れ相應の用
事に忙しき身と云ふこと御聞分被爲べく候。機嫌
なほりし先の文に心おちつきての筆不精と御思
ひ被下たく候。此方の文おそきが儘又くし、云
ひて、傍らの君御困らせ被爲などはせずやと氣に
掛りながら、京都の伯父様御泊とて隙なく、つい

い遅く相成り候。白馬會へ御供せし由、贈物の數々
なか／＼に難有く存じ候、御禮申上ぐべくや。その
吉野とやら特別の贈物まこと見たく覺え候。吉野
と申し候へば阿歌が何時も何時もの去年の春の
吉野行の御自慢には誰も困り居り候。揃ひの御納
戸の矢がすりに、小嬢様は紫の帶、小さき小嬢様は
緋の緞子、赤の鼻緒の麻裏草履に草色の後掛申上
げて、櫻の杖つかせまつりしとは例に例に候。竹林
院の泊につきても、疲れし顔御見せ被爲で其處の
古代の朱硯借りて、御前様物書きしと能く覺居り
候。二人にて其處の前裁に落花拾ひ居られしを、自
分がうつとりと見て居りしに、西洋婦人に物言ひ
かけられ驚きしと申すこと、其は嬢様達二人を何

處の方ぞとの問なりと御髭の人に云はれ、自分は
唯頭のみ幾度幾度下げて居りしと云ふ御話、六田
の渡にて和歌の浦まで行きたし、其船傭ひくれと
だ、御こね被爲しと云ふ御前様の悪口、無理に御
供致せし奈良にも花は盛にて御機嫌が復りしと
云ふ手柄話、竹林院にて贈られし花の大房なるを
髪一ばいに挿せし儘にて、奈良を歩かむとの小嬢
様の詞に、小さき小嬢様大人しき大人しき方何とも
御言ひ被爲で有りしが、道の半丁程に厭に成りし
とその插花御抜き被爲し時、小さき小嬢様のほつ
と息つき給ひと云ふ氣の毒話、御歸りて五日程も
履物え穿き被爲ぬ御疲は、自分や小さき小嬢様の
二倍程なりしを、其處にては車坂、七曲も其知らぬ

顔して御出被爲しはえらき方なりと、我事意地が
堅しと何時も申す其迄自慢にせらるゝには我眉
顰まり申し候。家内にては此人、店にては岩吉が御
前様最負の音頭取にて、御出被爲ば御出なされば
に父上の機嫌損ねはせずやと思ふ時々多く候。御
前様くしく泣き給ふが故にとて、清元がたり御
招き被爲し由、あだに思ひては成らず候。母は涙こ
ぼれ候。其話歌にせし處、あの嬢様は定めし迷惑相
な顔被爲しなるべし、其時だけ私代りたかりしと
申し候。白馬會の畫最も廉きのにて御前様好なの
は何程に候や、我事彼保津河の額のみ眺めて暮し
居り候。彼河下りてまだ、洋風の建物ならざりし温
泉に入りしは御前様十七の春にて候。其時の黄八

丈あれより後は御着なさらす、二寸程の肩かた上あれ
のみは取らずに御送りせし其は、御前様御領うりやうきな
されとに候。里は未だ御下の、彼時はさまで御前様
に肖るとも思はず候ひし。其頃は何時も六花園、三
本樹が好に成りしは里が其地の學校へ上りし時
よりの事、我も父上も陽氣なのが好とて、春秋毎の
下河原の宿、世は楽しきものと思ふ中の御前様、學
校にて意地悪いぢわるされての事、少時たばの性質、終に
終に復なほらず、人は皆御前様をよき人と云へど、御前
様はまこと人を如何いか思うて御出なされるのか、知れ
ぬ様な所も有りて、母にまで隔意へたてが有るのかと思
ひもしたれ、御前様が我事一番かわゆく覚え候。母
の返事が遅いとて死なむなどの文書く子の有り

申し候や。氣を附て大人らしく大人らしく御成なさるべく候。其處の銀杏返いやならば時々は島田にでも御結なさるべく候。東髪計りにては里の様に生際が淡く成申すべく候。竹村の清雄に醫學士に成るまで生きて居たしと申せしに、御祖母様は一生死なねばよいがなあと申し候。一生なりと二生なりと生て居りて、御前様まことの大人と成し姿が見たく思ひ候。歌よむ子御持ち被爲候こと悲しく候哉。など云ふ詞此頃の文に餘り無きを母は嬉しと思居り候。其が善きなり、彼子女の子としてはどれ丈のなど、松田が生意氣なる事申す時、女の子としての教に足らぬ所も有りやと申し度も成り申し候。親は思かなる者に候。思はず長き文と成

り候。何卒宜しく御傳へ被下たく候。

貳拾九日。
阿歌が参らば更に本場のを喚びて明烏きかせ遣らむと其處なる君仰せられし由、一昨日より阿歌は大變に候。先生はえらき方なりとの話初り候て、其は其は大變に候。初めて大坂の御宿へ其方の供せし時のこと、今更らしく語るのに候。簾を後ろに欄に凭り掛居られし白地の浴衣姿は、二十を三とも見え給はざりしなど申し候。誠に候や。さては其時覺應寺の新發意様鐵南とやら申す方の御おどけ遊せし話、濱寺の會に御迎に行きしも私なり、山川様と共に海邊松原歩いて御出なされし時、私の

鼻は高かりしと此人にも困り申し候。四筋五筋の
ほつれの髪、あれさへ搔上させて被下たならばと、
此人とて申し候。名は美けれど亂れ髪、今は況して
如何して御出被爲ことかと其のみ氣に成申し候。
あの髪に油思ふ程つけて島田に結ひたし、嬢様御
怒り遊すとも厭はじ、東京にては其髪に御結ひな
さるゝ事も有りとか、外なればと大人しう油濃く
塗られて御出なさる事なるべし。髪結の菊これは
何時も何時もの噂、語るは秋の事ばかり、今に此鏡
へ其子の話が凝らうぞと、笑ひ苦しき折節の候。人
憎まれせぬ子ぞとは思ひ候へども、母より外知ら
ぬ妙なる所ある御前様の性質、それが露骨に出で
候時々、御前様憎まれ兒に成るのに候。我儘と云

162

ひては御怒なさるべきを、男ならば其にて濟めど、
女の御前様それが出る時々、是我儘と申さねば成
らず候。人中へ出ては自分と氣が附てとは思ひ候
へども、或は母近からぬ爲め其様の振舞、言葉、皮肉
の様な言葉云ひたりして御出被爲はせぬやと案
じも致し候。時々も御隙あらば牛込の河井様方へ
御話聞きに御出なさるべく候。醉茗様御夫婦を兄
様姉様とも御思ひ被爲べく候。何時か佛事の日に
御参り合せ被爲し由。堺風の御料理頂きて嬉しか
りしとの何なき詞にも涙ぐまるゝは親なればに
候。夜寒く成り候、御前様も御厭ひ可被爲く候。

163

二日。

また何やら萎れて御出被爲候やうの文、武藏野の
空とやらは然う定らぬ此頃に候や。年が二つも老
いし様とは今度上京なされし中山様には候はず
や。彼方は去年の夏きり御前様に御逢ひなされぬ
のに候もの、去年より御前様一つ大きく成り居ら
るる事は當然に候。一つ位は如何様にも見え候日
の候ふべし。其様の事氣にして御出なされては、此
後こそ御老け被爲べく候。天上の人に年は無きも
のをと其處へ御立なさる少時の前、紫紺に菊の遊
禪の裕荒かるべし荒く成るべしとの母に御見せ
被爲し元氣よき笑顔に成る事は叶はぬのにや。あ
の様の心にてさへ居らば、御前様が程の四五年は
髪一つ落つるものにては無く候。其様の事のみ言

ひ思ひ居なざるに就ては、其處なる君終には悪し
く思ふこと有るべくと思ひ候。母が詞はまことに
候。御前様思かならぬ子、よく御思ひ見なさるべく
候。其上に何やら僻みも有るやう我事思参ひらせ
候。それ性來にても有るまじければ御前様の癖な
ればと母は何やら悲しうも成申し候。其方が上の
二人が姉、なさぬ仲の其子に僻ませては成らじ、僻
ませじ、我心をも如來様御僻ませ遊すなと一心に
念じて其方が姉様を春の風やはらかき中の家庭
の人と嫁がせて我はつと息つきし間に御前様さ
う成られしに候。僻みか偏屈か、人には掩うて掩う
て見られぬ様と、御前様爲し居らるゝ迄も母は知
居り候。母は二人の姉の枝振見るに下枝の其方振

返り見る間の無かりしに候。されど六人の同胞の
中にて最も多く今日の日まで共に居りしは御前
様に候。男の兒、其方が兄弟、早くより出しやりては、
母の勤ぞと淋しとも申さで有りし我、里は十四に
て京都へ出す時のみは、御前様と共に泣きし所、斯
かる病身に成りては、まこと我事御前様一人が頼
みにて有りしに候。ひと夏の宇治の逗留にも、母は
里よりも年上の御前様を抱きては寝ねはせず候
ひしや。里がねび、形を作し來りしと聞くよりは、其
方が黒髪長きを稱ふる人を母は嬉しと思ひ候ひ
しぞや。父なる人におぼえ、睦じからぬ子には、母の
情の斯ばかりに掛るものかと自らを疑ひし事も
候ひし。在らば一つ年上の恭二郎、父上孫が中にて

も殊に清雄を秘藏に遊すは、其幼な顔の眉目口元
恭二郎が生立ち行かば此通その御心御洩し遊し
はせねど母は涙に候。生れて一年とふた月、阿光が
抱きて火鉢の側に傍目の少時を、其處の赤き火、雪
のやうな消え相な綿のやうな柔かき小さき手に
握らせし魔の所爲、店の兒供さへ御打なされし事
なき父上、其時のみは總領のいたいたしき阿光を
何とするぞと御責み遊し候ひしぞかし。兄様とて
小さくて御亡なり被爲しと聞きては、私も抱て上
たい様な可愛らし相なと、何時も罪なき其方に母
涙とむる千藏院の小さき墓の建ちしは、其より一
月の後、明治十二年十月七日とあるは、幼きより御
前様讀み慣ひ被爲し所。力御落し遊せし父上の唯

一つの慰めは、ふた月立たば初聲上ぐる人を其兒と見むの御心、我とて同じなりしと御知なさるべく候。年の極月の末その時は我生みし阿花と共に三人の姉頂きて、御前様女と御生れ被爲し。父上の失望、歌よむ人の御前様わか上ぞとは思はで、思ひ遣り爲さるべく候。七夜の朝御出掛なされし儘、御遊び遊ばす伯父様達を苦々しき事に御思ひ居なされし父上の、道頓堀は角の芝居へ、馬車ゆたかに人具して御出を茶屋の門に見しと云ふ人今なれば電話なるべし。濱の一方より昨夜より無理計りの仰、番頭様の誰かを御迎にとの洩れ聴き、私が濟まぬ事をしたと其中に姑様への氣兼、この儘死にたやと思ひし母、其方が寝顔見ては、我死なば此兒

は孤兒同様ぞとの夜毎の悶えに産の血納り損ねて、我ふた月を膝行の足立たずと成りぬ。やうく床離るゝやうに成りし頃を我乳ふつと上りて固より瘦せ瘦せて居りし其方、夜泣朝泣、泣虫になりしを、其頃は最うおとなしう、内に居らるる父上、また御機嫌損ねる様の事の有りてはと、乳母と共に柳町の叔母様の許へ預けては、十四丁の道姑様御眠み被爲て後を提灯ともして下女も連れず、我は毎夜其方が顔見に行くが樂しみにて候ひし。さうで有らうと思ふに違はず、叔母にも乳母にも附かず、泣きちぎれて居るを、乳なき母が懐にとりて、其濱邊住吉の松原近う揺ぶり揺ぶりて往きし夜も有りしと御知なさるべく候。大和川を渡る時々、長き

橋二度は必ず因果なる母と此儘と思ふが常なり
き。内へ御歸り被爲しは、弟の三郎生れて我肩も廣
く成りし其方三歳の秋にて候。御前様大きく御成
なさるが儘、父上が表面の角次第に取れし様なれ
ど、他の同胞が上に無き心の薄紙次第に數重なる
と知りては、母は御前様を泣き候。其には然りげな
くして御出なさる其方に母はせめて繕ひも取な
しも致居り候ひき。世に二人の親子の御前様と我
までと思ひ交して、我斯ばかりに御前様戀しく、母
を母をと夢に叫ぶ折々ばかり身に泌む哀はあら
ず候との傍の君の御文さも有らうぞ。母は上には
強く云へど何時も何時も泣居候。思はずも繰言長
くも候ひし。明日の天長節には孫伴ひて梅が辻の

菊見にと父上は楽しみ居られ候。やがては紅葉に
候べし。あの山越え越えて京へ歸るのな、いやと、
紅葉屋の高雄の朝を御困らせ被爲し御前様、今傍
らの君、家の前の二丁の坂の上、下り、見る目まどふ
痛々しきさま、涙の中の樂しき山居と有りしは、苦
し切なしを母に云ふが如く御くどき被爲にては
無く候や。御前様ゆめにも今の身を御歎ち遊さば
罰が當るべく候。中山様上京遊せしを、其處に一人
兄ふえし程の母は力を覺え申し候。

七日。
寫眞受とり申し候、これは何時御寫しなされしに
候や。此やうの髪かみの結むすひやう故と歌申し候。氣分わ

ろからぬ日、少し大きく至急御とりなさるべく候。
とりあへず。

— 晶子作 —

あざみ草

おほかた人のくちづけは
あだなるものと知るからに
さては手をだに觸るなとて
つらきさまなりあざみ草

姉がはだへは山百合の

225

きよきといづれ白あざみ
いもうとが頬は紅蓮の
羞を帯びじや紅あざみ

226

媚あるものを美しくしと
人みな愛づる世となりて
なさけ殊なるはらからは
醜女が際に棄てられぬ

二人夏野に見かはして
心やすしと笑みにしが
年ふるまゝに少女氣の
世を咀はしと思ひてき

秋の虹さすこのゆふべ
『あはれ汝こそわが集に
はじめて適ふ花なれ』と
手に摘む君は誰なるか

わびては額の瘦せぬれど
世におもねらぬまなざしや
むかし楚の野に一人見し
賢者の相も斯くありき

まことの位もつ君は
げにも然かこそ尊きか
あな見よ虹はめぐりきて

君がうなじに光あり

すねて悔いざる子が幸は
斯かる君をも見まつりぬ
百千の花よ目をあげて
うらやみ給へねたみませ

今ぞおぼゆるはらからが
千とせ知らざる戀の息
うれしとばかり集の上
君が手の血に口づけぬ

飛鳥かぜ

(大和紀伊の旅にて碎雨清亂二人と作る)

青雲にむら山うかび金色の鳶が日を喚ぶ
大和高原

大峰の鬼の子どもに髪ひかれ葛城女神泣
く夜は明けぬ

美しくしき神代の巻の戀をとこ畝傍耳無出
て我等観る

ほがらなる大和の鐘や案内者が奈良の大

路に出で初むる朝

古山の香具山みればよるこぼる過ぎにし
母のおもかげのごと

かたし貝京はうつくしかたし貝古りし眞
珠と大和は光る

奈良すぎて禮讃誦せぬ子は外道舌は薊と
眼は石と成れ

大和ゆけば昨日かあらず前の世か飽かす
相見し子が國と似る

天平や大御代かざる美は盡きぬ妬し皇后
のおん名光明

瑪瑙もて瑠璃もて句ごと金の扉に彫らば
や飽かめ奈良の禮讚

奈良によきは朱の宮かこむ杉木立舞殿う
づむ古代しらぎぬ

神藤の垂花めぐる朱の廊に日傘して入る
春日少女等

春日女が藤の葉摺りし舞ころも小椿かざ
し眼にやはらかき
しら裳して灯まるる宮のしら儿帳内ぞか
しこき金の御格子

飛鳥かせ神代の雲を吹いてきぬ春日木立
の藤ぬらす雨

春日舞なかに鞆鼓うつざれ翁おん名は鳥
帽子由良由良命

春日野の躑躅がなかに車すゑ待ため今か
も億良等の來む

清き夜や春日の神馬翼生ひて紀伊に行く
夜か星ひろごれる(橋本驛に宿る)

わすれたる我が菩薩名もをしへませ兄佛
多き二百二十寺

高野山大師十二の面のこす頬の紅なれや
石楠の花(宿れる常喜院の庭に此花さかりなり)

山駕籠に牡丹そめたる緋遊禪京の講者も
逢ふ高野道(高野口驛にて)

— 鐵 幹 作 —

246

春のひと

年も明けて候、柳は芽ぶかすとも、人の心に早春風
は根ざし初め候はでや。さるにても世には頑かたくなる
やうに思はせて、二十とせのたしなみ深けれど、ま
ことは玉のさかづき、底をも裏をも味ひ給へる情なまけ
知りの繪師の君、われからみやこ離れて遠き函館
のおんひとりすみ、北海の雪に火桶かかへて、銀瓶ぎんびやう
の屠蘇も手酌に召しては物足らぬこちおはす
べし。いざおんあたりへと、いろいろの美しくしき際
の人擇びてまるらせ候。御こころにかなはば、狎なれ

247

給はぬほどに、こなたへ一人一人書にして御返し
下されたく候。

ちごわ結ひて舞のかざしをあらそひぬしら
藤の花やまぶきの花

浪華の長者が家のふたり娘、年子にて、姉なるは十
二になり候。母は住吉の社家の娘ときこえて、月ご
との舞の宴には菊水の幔幕うたせ候ぞかし。世に
も氣高き二輪の蕾いづれか名花の種ならざりけ
る。

をとめごの如何にしてまし賜りて立てば地
にひくしら藤の花

初めて禁内に召されぬる采女の、やうやう十三と
申すに、うまれは加賀の地頭が末むすめ、舞の上手

とは若き公達の何を聞き僻め給ひて逸早に奏さ
れけむ、勅なればいと畏し、前髪に紅き布さなが
らの田舎舞、はづかしと舞終れば、玉の御聲御簾を
こぼれて、なにがしの中將うけたまはり、御前の瓶
のしら藤ひと枝、これかざせよと賜ひける。かざせ
とは帯に捲くことか、手に受けまつりて立ちあが
れば、こは如何に、地に曳く花のわが丈にも餘りぬ
る。

わがおもひ鸚鵡に秘めて鶯にそぞろささや
く連翹の雨

風はさわげと雨はふれど、いささか心願の節あり
てと、年ごろを清水の観音様、わがいつはりの守本
尊に爲し奉ること罪たそろし。船場と云へば浪華

の商人氣質ここに精をあつめて、家並舊家を誇る
なかのいもた、家は早うより亡し、戸主の兄は妻
子ある身の笛道樂、船道樂、釣道樂、解船うかべて阿
波の鳴門へ鱈つりにも行きぬ。しら髪見ゆる母は
孫つれての御寺参り、寄進と云ふに榊屋御後室殿
の高札目に附かぬは無し。さるが中の氣隨者、女そ
だちなればとの蔭口きこえぬにあらねど、親類縁
者、琴の師匠、薩摩堀の御連枝が御裏様、人を替へ手
を替へての意見口説も厭々で通して、ここに二十
三の處女すがた、散らぬ限りは花と稱へよ、碎けぬ
程は玉と云へよ、如何で人一代驕りの果も極めむ、
嬢様とはわたしが墓までも自慢で持つて行く名
とあるに、揃ひし風變りの兄妹と噂して、誰もくや

しがりの。嬢様の愛で給ふは鳥なり。卷繪の籠、色さ
まざまの房かざり、好みの有りだけを盡して、摺餌
も手づから遊ばすに、中にも鸚鵡は兄様の物とあ
りて、憎しとならねど、鶯のかたを殊にかあゆがり
給ふなりけり。

金の間に晝の熟睡の春のひと孔雀しづかに
彩羽つくるへ

妾と書きておもひものと假名ふるたぐひの際は、
人扁に車と書きて矢張る、まと訓まする作者得
意の題目に候。こなるを其れと同じやうに御覽
くださるまじく候。君王これより早く朝せず、うた
た寢の透きかげには李白も膝腰立たず成り候。氏
は楊家の女、名古屋産越後産にては無之候。

梅の奈良古代雲がたわかむらさき七重の袖
の人見るものか
京の宮の春の御使たくれつや春日は梅に去
年の舞ぎぬ
梅しろう春日古代の朝かぐら摺裳ながきは
藤原の子か
夜神樂の鞆鼓つめたき梅の奈良まじりて歌
の紀氏が子や無き
菊の香や奈良には古き佛たち行脚の翁の見つけ
られし所はさびしく候にわが目に入りしは春日
の神樂堂に帳たれて花のやうに居ならぶ一群の
少女たちに候紫に雲がたの古代なる唐ごろも七
重の袖の美しくしきに見ほれては業平なくなりて

一千年人は猶奈良の京に知るよしあまた持ちた
く候衣のほひとりどりまばゆきが中に唯一人
眉ほそやかに三五のたんよはひと見る君檜扇に
面なけば掩ひ給へど自づと洩るる白梅の品高き
おん容態なつかしと近う寄るにしら綾の唐ぎぬ
いたうもねびて去年のままなるは氏はすぐれた
れど父の大臣亡くならさせ給ひては院よりの心
づけ疎かになりて世の蚤縁も淺ましくすたれけ
るにやと泣かれ申し候すり裳長うひきて舞の袖
ゆたかなる君のほこりかなるは母なむ藤原なり
けるとも注さまほしくはた篝火のひかり梅に自
む夜神樂にまじりて鞆鼓にあはする歌ごゑいみ
じき一人の君の賢しげなるは貫之を祖に持ち給

ふ姫ぞとも想はれ候。
かかる君達なほ参らせたく候へども、浪あらし北
の海、さらでも皆船ざらひの君達にたはし候へば、
次の便まで控へ申すべく候。

—飯 幹 作—

揺 籃

くしみたま、汝にやれば、地にし歌あれ、
にぎみたま、汝にやれば、地にし戀あれ、
あらみたま、汝にやれば、地にし敵あれ、
(あなかしこ、靈の身分けて、いざ往け、と。

254

高みくら、あゆび下りてゆ、まだ百日、
今なりぬらし、真珠具——やはき瞳子に、
うつつ、まぼろし、映るは猶も昨日
手さぐり、將や、まどひし虹雲の路。

如何にと、なさけ、御親の神のみおもひ、
遣りし小さな天づかひ——我兒に、
下りきては、追ひきては、又も揺籃の中、
賜ぶや、慰籍と、故郷「天」の眠り。

人の王者が(あはれめ、)白髪して知らぬ、
平和、快樂、たからの秘め庫、
あゝ今見よ、兒にぞ獨ひらけと、



許ればこそ、仰ぎ、打笑み、鑰とる手態。

さもあれ、刻みせわしき地上の「時」、
一分一秒、そもまた天の千載と、
會して知りげや、歌びと、若きあるじ、
寝顔に興みち、兒の側、日暮わする。

あな遠退くよ、圓き環、黄金御光。
現世一人の國母、——愛の精——
二十びと、美しくしき汝が母に、
今乳の時ぞ、かき抱け、口づけよとこそ。

— 鍛 幹 作 —



舞ればこそ、仰ぎ、打笑み、流るる手態。

さもあるれ、刻みせわじき地上の「時」、
一分一秒、そもまた天の千載と、
會して知りげや、歌びと、若きあるじ、
舞顔に興みち、兒の側、日暮わする。

あな遠退くよ、面き環、黄金御光。

現世一人の蘭母、——愛の精——

二十びと、美しくしき汝が母に、
牛乳の時ぞ、かさ抱け、口づけよとこそ。

—— 櫻井 作 ——

すだまの歌

人目にふれじわがすがた
見ればわれさへうとまるる
てる目をよけてあめつちの
陰と闇とをめぐらまし
(あゝなつかしや
ながき陰、ふかき闇)

わが髪ふれて薊さき
わが音まねびて鳥なき
わがつく息におくつきの
古人どもは呻吟き出づ

(あゝたもしろや
その惱み、彼の悶え)

荒れにし寺の鐘樓に
鐘ひとつ打ち小躍りて
きざはし踏めば黄泉の氣に
酔へるがごときわが咀ひ

(あゝ咀はしや
怨み足り、嫉み満ち)

今ゆらぎゆく鐘の音に
寒きわが呪を誦しあはす
彼の光ある世のうへの

人よかたみに讐となれ

(あゝ嫉ましや

戀の讐、戀の執)

まどかなるもの全きもの
むつまじきものあまきもの
なべて衰へほるびはて
麻幹のごとく世は枯れよ

(あゝすすさまじや
麻幹こそわがすがた)

世の戀妻よわかうとよ
生爪を剃ぎ髪を断ち

火焰ほに投なげて祈いのり泣なき
わが名なを呼よべやすだまよと

(あゝ狂くるほしや)

火焰ほこそわがこゝろ)

——鐵幹作——

緋芍藥

あらぬを忌みあらぬを妬むものおそ
れ才なるものの病なるべき

東海寺牡丹の庭に見て泣きぬすでに

200

201

病やまませし偉たなるおん方かた
地の百も日かわが目めわが師かをえうつさず
戸かどに立ちとへど野のにきて呼よべど

(以上二首萩の家先生の妻中に)

火かならねばなに燃もえしめむ地のひと
りをただたひらかに守まもりまつる戀こひ

母ははこそは何なにに生きしと知らむ日の汝な
が頬ほおもへばうつくしきかな

椿つばきおちてけはひの水みづに凍こてたりと口くち
疾はやに告つげぬ紅べにささぬ顔かほ

うつくしき花屋が妻の朝髪とわが袖
と吹く春の風かな

君に似し白と濃紅とかさなりて牡丹
ちりたるかなしきかたち

六尺は魔におちやすき春のたけと髪
はそがせつ山すみにして

あゝ聖母母なり子なり君に肖ると御
像なでしも少女なりし日

われも人も兄に惜みし舞ごろも藤ば

2032

な染を二の兒に裁ちぬ

2031

春の夜を説けな御功德法華經に誓ひ
やや似るもの報謝せむ

——晶子作——

夏草

(人々と夜を徹し字を結びてよめる中より)

さすらひ

さすらひが奪とりし昔をよみがへせ
わかき眉して君を見むもの

こほろぎ

いつの世かいたづら臥しの秋びとが
汝れにをしへし歌ぞ蟋蟀

帆

入日よき浦や紀の浦君のせてくれな
る染めて小さき帆歸る

座

待つと云はゞ母に具されし大寺の春
の夕座もすべり出でまし

晝舟

264

265

蓮かげにうすもの透きて風みちぬ君
うたたねの細き晝舟

風

このおもひ火中に湧きし旋風の
ところさだめずもて狂ふこと

雑

しろき尾のたり尾の鶏の屋をめぐり
おどろく風に紅梅のちる

なでしこ

麥の穂になでしこまじる津の國に肩

上ありて歌はおぼえし

狭

馴れぬれば隠岐の島姫まき帯の狭き
も京に見ぬあはれかな

地

おほつちは如何なる母のふところぞ
花ぐさ追ひて君も急ぎぬ

茜

薩摩の海茜あかねにほへる朝靄に南へくだ
る鮪しほつり小舟ぶね

265

267

瑠璃

やはらかき想ひや夢やましら羽の鶴はと
とぶ空や瑠璃の潮うしほや

壁

君が村は菜たねの花に南うけ小川ひ
とすち壁に船よる

男の名

貧しさは酒はわが兒は似たるべし憶
良ほほけて戀を云はぬかな

おなじく

御池にて蕪村にわかれ女づれ内裏う
しろに春の月ふけぬ

廣

あめつちのひろきがなかに君ありて
足らぬ光を歌もて添へぬ

のろひ

のろひ給へこの子めしひて鬼を見ず
この子口ごもり泣をえ知らず

柱

髪は二十おもひは老いし秋姫と金の

268

柱にゐよりて泣きぬ

269

— 鐵 幹 作 —

禍 鳥

知らざらば知らでありけめ
氣隨なる一人少女と
八とせぶり安房より來つる
わが乳母の夜がたり憎し

わがためにまことの母の

今ひとり世におはしきと
夢よりもはかなきことを
おどろかし初めて告げぬ

さるにても母はたふとし
亡きひとの形見兒そだて
二つより十九の今日まで
如何ばかり勞は見ませる

髪かざり衣のえらびや
書まなぶ貴族の校や
樂堂や四季の歌舞伎や
みなさけは身にあまりけり

ちちははの御胸の鍵は
ゆくりなく我手におちて
秘れたる扉ひらけば
わが家の光は逃げぬ

何時の間に潜み入りける
禍鳥のけがれ心ぞ
おのれから闇を好みて
疑ひを餌とあさるらし

あなかしこ母は此日も
にこやかに召しますものを
わが心きのふには似ず

つく息も隔てられける

— 鐵 幹 作 —

君

このやうの紙京より貰ひ候。ちかごろ新らしき人
むかへて、その人にも私を姉と呼ばする男、勤めは
判事と空そらぎき怖ろしく候へど、かんでい流のちら
し文字上手に、下調したての公文くもんともすれば秋かせや上
五文字、中七字、胴首どうくびきれぎれの漫ろがき、むすびの
哉やの字いささか讀みにくきよし、中食ちゅうじきの殻からかたづ
くる其處の小使にも知られ居るほどの男に候。陰

し

し

曆の彌生桃どき、雛祭に大さわぎ致すは毎年のこと
とと、私のわがまま、明治法律に在りしほどのこと
覚え居候て、去年の夏より京の在官、この物なに
がな五重の段の片隅へ参らせたくと存じながら、
きらびやかかの西陣の品は貧しき少尉相當官が手
にも合はじ、京紅、京扇は田舎への博覽會がへりと
た笑ひなさるべし、さては鶯の羽あらふなり紙屋
川、ふとして其處に見つけし菜の花の色したる半
紙十帖、雛君のたん机にのせ給ひて後は枕にもと、
仰山なこと申して送り越せしに候。
又しては冴えかへりがちに籠の鶯も病みほ、け
候頃を、あなた様の御腦輕からすと、みぢかき繪葉
書のお知らせ案じまゐらせ候。今は暇とりて阿波

のひと馬醫者の桑田氏が一族にかたづき居り候
彼のお松の候はば、如何ばかり驚き候て、私にも必
ず龜井戸の社へ梅ぼし絶たせ候ことと、斯かる時
心ききたる書生どももおはさねば、傍へに居ぬ者
ひたと戀しく相成り候。病みては賢くも見え候御
仁おほかる世に、(憚らず申し候、ゆるさせ給へ。)この
月の「明星」の名も鄙びたる藪椿、あれをあなた様の
お作とは一度は大きな活字のお名前にて、二度
は御病氣のお葉書にて、やうやうに頷かれ申し候。
さてこそ輕からぬおんわづらひとは御腦をお案
じ申し候へ。今どき如何に枕あがらぬやうに成り
て人初めて惜しきものに申し候へばとて、妓が口
の尾道、あらせますな戀御歌に目まろくして詩才

を讚へ候までに世のなか慈善にもおはすまじく
や。お見舞の口上にこれはまたさしで過ぎて消え
も入りたく、行儀なしのづけづけ、お叱り下され
候。序に候へば申上ぐべきか。藪椿は總じて三十
年の御集「鐵幹子」にお入れ成さるべきをお忘れ成
されての反古歌と、私となりのお徳様などには辯
じをるのに候。その氣に成りて拜見致し候へば私
の好きなもの少しは目にとまり候。
わが歌にしらぎぬかへし舞はぬ子は牡丹
が根にぞ斬りてすてまし
これは官妓なにごしなど事々しきはしがきをお
とし給ひ候。

姫親王の御集にのこる君が名と史官が諱

まぬ御代まち給へ

齋宮の宮か、式子内親王か、おん名何れの御集にも
のらばいよいよ驚かるべく候。

むらさきの御袈裟かづきて僧都らがまろ

寝よろしき春の大原

兆殿司の涅槃像枕上にきらびやかに、書院の花は
山吹に候。

この男御酒も賜ふべし雖ぎみにざれ歌申
す器量はるべに

猪口は小さきもいなます、劍菱ならぬをとほ、さて
こそ末の娘はこの伯父さんを怖がり候ぞかし。

はづかしき尼そぎすがた京にきてふりし
紅屋が主の柩もる

若き今日の佛がおん上、御親族がたの知らせ給は
ぬことの、一つ胸にたゝむはこの若尼に候。お暇申
して宿に下りて間もなく大和の法華寺に入りし
は、一昨年の藤ちる頃に候ひしか。

妻が髪のおとろへおもふわびずまひ男な
れども泣くを咎めじ

泣虫の男もちてと、女は増長も致す日の候よし。

五つより蓮月が手にたけのびし兄の阿闍

梨も老の見ゆるかな

京なるおん兄の阿闍黎は私も一とせ拜みまら
せて候。鼠のころもに木蘭地の袈裟めして、畏き御
修法の座に着き給ひし時、道俗のよろこび雲の如
く湧きて、祈から遅れし敕使のみくるま、東寺の御

堂に横づけにし給ひしさま忘れず候。

私この頃ふと奈良に住みたく相成り候てその支
度いたさせ居り候。鹿の音ならで正倉院の御物な
らで、春日の祝女の催馬樂ならひたさに候。

奈良にすまば奈良のさくらもうとまめや
藤原なのる母に具されて

かゝることも思ひつづけ候。出で立ち候は祇園會
京に行はるゝ頃に候べし。髪ゆはせ候人のみはこ
ちらよりつれまゐらむと、其ひとがら今より探し
もとめ居り候珍しく私の詠草ひととぢ。

歌はみな木蓮きりし口ずさみ有髪の尼が
二十あはれめ

公には成し下さるまじく候。

夢のうち

興きたらず七寶みたす珠の宮詩なき
七月燭を照さす

身は化して今夢の鳥ひかる翅の淡く
れなるに飛ぶや君許

三十をふたつ越したる春のうた酔ひ
て題すと京にひまなし

くだけたる瓦も棄てぬ執をもて紫摩
黄金の座に盤つけぬ

才に病む詩歌なさけにわぶる戀ひが
しに一人王わかうして

相見しは大き銀杏の秋の岡金色なが
すひかりの夕

あこがれは天を觀をへて地に還るい
と大きなる星は君よと

菜の花に楡木まじれる野をおもひ來

しやと云ふも鄙めくものか

櫻とは花なり醉へば京にても袂かへ
すを舞と云ふらし

手にまけば玉のやうなる櫻びと鶯な
きて京の夜あけぬ

臣捷たば長白の北五萬里を妻が香る
湯の料にと奏せ

相ならび古歌誦せし人ゆゑに春日木
立の路をわすれず

金殿きんでんに満つる春はるぎぬ春扇はるあふぎ人と牡丹の
香かほに蒸むす日かな

もののけも櫻をかざすおぼる夜と京
の廢家はいかをよぎりて云ひぬ(岡崎にて)

頬ほに流れて涙は熱しかにかくにあこ
がれ心おさへかねつも

おごる子は昨日きのふに足らひ明日あすに満ち
中の今日けふさへ飽かずと泣きぬ

花かざさせ光環ひかりわとらせ詩に讃じひま
282

なきものかおもひでの子に

283

はたおもへしろがねつづる白髪しろがみして
逢はで戀ひぬとさしおかむ筆

日に幾たびまた藝の魔がたはぶれか
才さいのうつろを嘲あざわらむ勝かち閑かん

以下師のみまかりたまへるに

あたらしき師がおん歌のさま得むと
近うさもらふ通夜つうやならぬかな

あめつちに一人なる師のみひつぎを

星夜こがらし寒きに守る

我をしもをさな兒のごとおぼす人手
とらす人はいまさすなりぬ

ませばこそかたはに生ひしひとり兒
も悔いす憎まぬ世とは見けらし

師が御名は世ひと皆知るたはれ男の
わが名は師のみ知りておはせし

ましら羽の八ひろ鳥船ひかりさし大
き御魂は今か天飛ぶ

281

282

あめつちは大き御魂のかくり宮日あ
り月あり花ありて守る

小さき弟子は御兄御姉をうらやみぬ
師がおほまへに名足り面足る

兄たちの御弟子の後に脊かがめて御
棺の間ををろがみて居る

— 鐵 幹 作 —

涙の記

時まさに、明治三十六年十二月二十日の午前十時。冬の空の冴えて晴れたれど、凍りしやうなる白き靄の氣、低く萩の家の庭を籠めたり。この時、木立のかなたなる離亭に、冷人達がしらぶる樂の音、しづかに起りぬ。師の君が夫人の兄君菊川氏、あわたたしく離亭より來りて、祭の式はじまりぬと告げ給ふ。母屋のかたに、慣れぬ上つ代ぶりの喪服して、立烏帽子に白き直衣つけたる桂月、雨江、月杖、躬治、清春、われの六人、口そそぎ手あらひて、茶室、書庫などの前を、せまき廊づたひに馳せつとふ。かしこまり並みある人人、はや椽にあふれたり。親戚の君達に添ひて、八疊の室に北の敷居よりゐざり入る。師の君が安睡したまへるままの形にしつ

らへるおん棺は、四疊半の室の床の間のかたに据ゑ奉れり。おん前の机どもに、副祭主なにかし、紅白の幣帛、神酒、くさぐさの御饌物、禮たたく捧げ奉る。そのほどは、俗人達、八疊の室の東の窓に並みゐて、笙、横笛ども吹きぬ。祭主なにかしが御魂うつしの祝詞を白す時、わが師の君は、いかで要なき黄泉の國には往きたまはむ、そのあたたかくやさしきにぎ御魂、くし御魂と、はげしく大きな荒御魂とは、縦横無碍に、このあめつちに満ち足らし留まり給へるものを、あな人めき、語多しとも、例のほほゑみてや聞し給はむと思ひぬ。祝詞はてぬれば、また樂の音になりて、人人おのもおのも玉串を手向けたてまつる。先づ喪主直幸の君、

當歳十七のうらわかきに、折烏帽子かうぶり、黒き
衷服つけ給へるが、ひたひぎは、おもざしは更なり、
少し聳ゆるやうなるおん肩つきなど、いとようち
父君に肖^にたまへるものかな。物心しりたまひてよ
り、初めて斯かるこよなき憂には沈み給へるもの
から、さる中にも、今朝のほど遽かなる修禮^{しうらい}に、人の
誨^をへまつれる作法ども忘れ給はず、則^{すなは}ちの如く禮^{れい}を
つくして玉串をたてまつり、かしは手三つ拍ち給
へるおん容態^{ようたい}の、おほらかに、言ひ知らぬあはれこ
もれるも、あな、まさまさと、父君のおん威儀を見た
てまつるなりけり。この時、おもはずも熱き涙はわ
が膝にはしりぬ。

ついで、二男直道の君、長女すみ子の君、三男直兄の

君、四男直美の君、次第に玉串をまゐらせ給ふ中に、
四男直美の君は、やうやう四歳におはす。何事とも
知り給はず、ただ兄君姉君のしたまふやうまねび
て、進み出で、玉串うけておん前の机に載せ、額^{ひた}ふせ
給ふさま、なかなかにおんいとほしく、悲しく、あま
たの大人^{おとな}どもを泣かshめ給ふ。女達はえも見まつ
らす、皆すすり泣く。まして、そを見たまふ夫人の君
のみ、こころのほど如何にぞや。後^{のち}ぞひの君なり。十
五にて師の君に添ひ給ひしが、水いでたる花のや
うに、おん美しくしきは稀なるためしにも引かれ給
ひき。二十八と申せど、常は二十^{はち}ばかりに見まつる
を、この日頃のおんやつれのけはけはしきよ。直美
の君のあと守りて伏し拜みたまふ時、ふさやかに

長うめでたきおん髪の、雪のやうなあん衣の肩す
べりて、師がおん前なる菅席すがしきに打なびきたる、古の
悲しき物語の中の若き女君をとこみ見るここちして、われ
も人も涙せきあへず泣きぬ。

親戚の君達の後のちに、われら門生、次第をなして玉串
を手向けたてまつる。今は悲しといふも詞足らず、
ものわきまふる心も失せぬ。ただ夢のやうに額ぬかづ
けば、如何に側目よそめには禮れいなくも見えつらむ。人人の
拜はいのまたく終るもえ待たず、やがてわれはすべり
出でつ。茶室の柱に、倒れつべき身を支へて、しばし
がほど、そこに心のかぎり泣きぬ。あな似氣なき涙
や、かくてあるべきかは、母屋ははやのかたにわが負ふ今
日のつとめも多かるをと、われと心に叱りて、ひる

き袂に涙おしのごひつつ立出づる時、ゆきあひし
は月杖。この人も同じ心に、涙は頬をつたひて玉の
やうなり。うるはしく若き詩人の涙は、わきてもう
るはし。感情の昂進したるわれは、そを見るに、更に
更に胸せまりて、涙は雨しづくと流れぬ。おもはず
面おもてそむけしに、かなたも見じと念ずるさまして過
ぎぬ。

われは又しばし、母屋ははやの後ろの馬道うまみちの窓に額よせ
て泣きしが、人人の再び離亭はなれのかたに馳せつどふ
けはひして、誰とも知らず、泣きごゑにわが名を呼
びぬ。急ぎまゐれば、人人おん棺の前に立ちふたがり
て、誰もすすりあげ、すすりあげ打泣く。今ひと目と
寄り給ふは、夫人の君なり。おしへだてて制したまふ

は、師が令弟壹岐氏なり。いかでやつがれにと聞えて、人わけて進めば、壹岐氏、おん棺の蓋すこしあけて、おん面ぎぬとり給ひぬ。黙禮する間もあらぬばかりに、やがてそのしらぎぬかづけ給ひて、おん蓋したまふ。この世にて、師の君がいといと最後のおん顔を拜ろがみまつれるは、なかなかによろづおくれたる末の學弟われなりけり。

ああこの瞬間よ、上に億劫、下にもまた億劫、さる中にしも、たまたま一たび遇ひまつることを得し師の君の、その神々しきおん顔の見をさめなるかな。悲しさは何にたとへむ。われもまた、女達の中にまじりて、面おほひ、聲あげて泣きぬ。あゝこの時、百雷のおつるやうにてすさまじく、おもはず耳ふたが

れしは、おん棺に釘するいまはしの其の響よ。

——観 幹 作——

なでしこ

いにしへに懼れ同時にはばかるとた
だに在る身の後おもはむや (人に答ふ)

はかなげに黄なる花さく水くさの五
瓣をだにも全く歌はむ

瀬の音や火桶かこめる七人に山は夜

となり霧うかびきぬ(人々と赤城山の湯の澤に宿りて)

いにしへか今かわかなくうつらく
大和こゆれば足る心かも

花さきぬこがねひぐるま奈良の代の
樂部の子らが警華のなごりに

秋の水君が夜ねぬ閨の灯の下の鏡を
出でて流るる

うぶごゑに諸天もどよめ花も降れ天
と地をさす指よと吸ひぬ(この夏男子を擧げたるに)

ひんがしのキイツと親もたふとびし
君が嗚びたる汝が名し思へ(泣菫君兒

の爲めに名を秀と擧げられたり)

なでしこの初花うすきくれなるのに
ほひは見たり君が片頬に

割籠して石きる人にもてゆくを安し
とおもふしら河の里

天上の榮華を見ずやかがやかに一朶
は斫れりこがねひぐるま

ほととぎすあら今眼とち思ひえてわ
が笑むものを疾うゆらぎ出ぬ

奈良の代は千とせの前に過ぎけるや
あらずや花に佐保の風ふく

牡丹こそ畫絹に足らめ一人の詩には
召しませ山東のひと

さく花はさまく 更に君が子の少女
を添へて夏はひかりぬ (人の女子を擧げた
るよろこびに)

ただひと眸利那をたもつよろこびに
命は換へつ億却の石

あゝ鐘鳴る夜は斑鳩に明けぬるや鐘
鳴る山の花に鐘鳴る

多武の峰檜原がなかの塔のもと千年
にひと日われに降る雨

親の日を里にしすめば念佛して華籠
には盛りぬ花のさまさま

あこがれや來む世古世をうるはしみ

うつら大和の夢殿に倚る

ほととぎす霧ふる谷の梅檀の大樹へ
とこそ斧は打つもの

わが母にしら髪も生ひすふるさとは
木の花さきぬ水にのぞみて

こほろぎや四十二にしてはてませる
師がおん墓のゆふぐれの路

裂くいかづち焼くかぐつちを父母に
もつ子と云はばやく得たるべき

はる

のろはるる身は枯木なし髪ほそり寝
れば屋の上に死鳥啼くも

遠妻をおもひてあればなよびかに夢
かのすがた蝶は來にけり

われ泣きぬ草をはなるる四五寸の月
と君とをそがひにはして

なでしこと前の河原と母さんと有る
國ならば京に伴れませ

親と師と後のふたりのよき人もよし

と見し山吉野よく見む

あめつちに石のみひとりいらへねば
その愚かさを知るよしも無き

うちつけに君を見るとて口ごもれど
市に立ちつつ肩瘦せぬれど

太白と上にきらめく星はよしおん胸
に輝る名を教へませ

乳や足らぬ兒はむづかりて夜あけぬ
と母が十九のおん手なるらし

夕立や蘆に流れし池中の盥にむれて
鴨の子啼きぬ

七間のすだれとわれの黒髪とゆふぐ
れに吹く大河のかせ

白のうへ黍がら積める屋の隅にうす
き月さし蟋蟀啼くも

祇王寺へ山を分くれれば路ほそり夕露
おきぬ葛のひろ葉に

十八の萬里が歌の口どさをかたぶき

聽けば世に足らぬ無し（平野萬里に）

透き影のほのになまめく夏木立なかに
水みづ紹すの帳垂れにけり

ほがらく叩けば鳴りぬ君が詩は秋
に古りたるしろがねの鐘（高村碎雨に）

しぐれては寒ふせふる日の山ごもり飯いひな
き鉢ひちに寒菊つみぬ

雲みれば飛ぶ馬おもひ虹みれば金かねの
槍やりして立たむと思ふ

302

303

くれなるの牡丹くづれぬあら今か漁
陽の鼓つづみ地をゆすりくる

甲斐もなきわが名や歌や朽ちし木に
幾たび斧を加ふとはする

大堰川濃き緋の帯のいくたりの鼓つづみ拍ひたつ
子こに船ははなれぬ

ひがみたるしら眼すが眼も頬ほの皺しわも
汝なんぢにしてはよろし横顔（山内垂吡子の歌をよみて戯に）

鐵幹作

自嘲二首

われ若^{わか}うてちさき扇のつまかげに
かくれて観たる戀のあめつち

——詩集「小扇」のうへに、晶子作——

こがれより毒に我れ死ぬ夢みびと
眼をうつ花のうるはしきかな

——この集「毒草」のすゑに、鐵幹作——

毒草をばり

冷艶白罌粟の如き、人は之を毒草といふ。純液
結晶して、阿片となる時、喫者をして、美しき夢
路に入らしめ、以て、この痛苦の存在を脱離せ
しむればなり。

鐵幹、晶子兩君の集は、銘して『毒草』といふ。逸才
兩君の諸作の如き、豊富の奇想は、人を酔はし
め、靈妙の高調は、人をして、詩境に己れを忘れ
しむるもの、集に題して毒といふに不可無か
らむか。

人生、智無き我に於て、枯淡なること殊に甚し
きものあり。悟りて何かせむ。醒めて經ぬべき

我世ならむや。苦きに忍むで、徳を積まむは、我願にあらず。寧ろ、芳醴を愛して、毒ともあれ、われ詩に酔はむ。

酒の醇なるものは、酔はしむること甚だ強く、阿片の精なるものは、眠らしむること極めて深しと、『毒草』收むるところ、詩幾首、文幾篇、著者は、敢て、之を鏤心彫骨の作と謂はざらむも、我に於ては、悉く是れ、至醇の酒なり。純精の阿片なり。我等、心に傷あるもの、胸に惱あるもの、いかにぞ、此の如き甘美の『毒酒』を仰ぐを辭せむや。

『毒草』刻將に成らむとして、鐵幹君、わが文を徵せらるゝこと甚だ急なり。情辭する能はず。厚顔、蕪言を卷尾に書す。

甲辰初夏

孤蝶

馬場

勝彌

『毒草』一卷、有り難く拜受仕り候。折柄の雨の
夜を、燈火かかげて、更くるまで讀み耽り候。逸
興は御言葉の毒もつ花の如く、病骨にも泌み
わたりて、何とはなしに五體のすがすがしき
を覺え候。詩はただ心のわづらひを慰するの
みには止まらずとこそ存じ候へ。

御作を誦して、はしなく思ひ出づるは、チヨオ
サアが『勳爵士物語』に歌ひたる、アゼンス五
THESEUS の牢獄に候。ここには井ナスに歸依
する PALMON と、マアズを禮拜する ARCTE
が、血眼になりて、あえかなる EMELYE 姫にあ

こがるるが見られ候。貴下は、當然落度なき守り役として、この頼もしき若殿原に、無用の鞘當詮議せさせぬやうの御心掛、然るべし。姫が手にせる桂の冠は、必ずやこの兩柱の神の氏子達が、ふたりして捧ぐべきものと信じ候。この集に『哀歌』『清水詣』が、ことに警策の名を擅まにするは、故なき事に候かは。これは誇るべき天縦なり。毒草一篇、尠からず眞面目をうかがひ得るは、小生の貴下に悦ぶ所に候。敬具

辰歳水無月十日 薄田淳介

與謝野様

與謝野氏著作書目

東西南北 鐵幹著

長短詩を收む。落合直文、森鷗外、井上哲次郎、齋藤綠雨、小中村義象、阪正臣、大口調二、國分青匡、正岡子規諸氏の序あり。明治二十九年七月發行、東京明治書院版。

天地玄黃 鐵幹著

長短詩を收む。明治三十年一月發行、東京明治書院版。

鐵幹子 鐵幹著

長短詩を收む。明治三十四年三月發行、大阪矢島誠進堂版。

紫 鐵幹著

長短詩を收む。裝幀畫は藤島武二氏の作なり。明治三十

四年三月發行、東京新詩社版。

うもれ木 鐵幹著

長短詩、美文、小説等を收む。山路愛山氏の序あり。明治三十五年十二月發行、東京博文館版。

みだれ髪 晶子著

短詩を收む。裝幀畫と挿畫とは、併せて藤島武二氏の作なり。明治三十四年八月發行、東京新詩社版。

小扇 晶子著

短詩を收む。裝幀畫と挿畫とは、併せて藤島武二氏の作なり。明治三十七年一月發行、大阪金尾文淵堂版。

毒草 鐵幹晶子合著

長短詩、美文、小説等を收む。上田敏、馬場孤蝶、内海月杖三氏の序跋あり。裝幀畫と挿畫は、併せて藤島武二氏の作なり。明治三十七年五月發行、東京本郷書院版。

毒草おくづけ

明治三十七年五月二十日	印刷	洋製金五拾錢	郵金
明治三十七年五月廿九日	再版印刷	洋製金七拾錢	各錢
明治三十七年八月廿五日	訂正再版印刷	洋製金七拾錢	各錢
明治三十七年九月二日	訂正再版發行	洋製金七拾錢	各錢



著者	與謝野鐵幹
著者	與謝野晶子
發行者	飯田尚
發行兼印刷者	吉田正太郎
發行所	本郷書院

大賣捌 東京堂上田屋林 平次郎盛春堂
 北隆館東海堂文林 堂良明堂
 關西大賣捌 大阪市東區 吉岡書店 杉本書店



